

博 多 49

——博多遺跡群第87次調査の概要——

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第443集



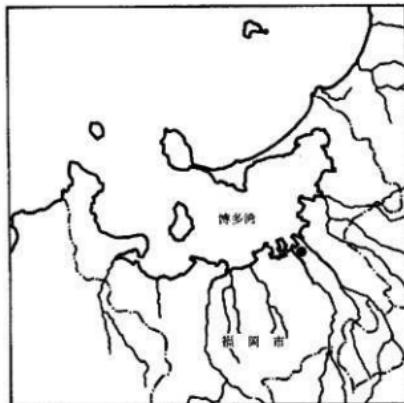
1996

福岡市教育委員会

博 多 49

—博多遺跡群第87次調査の概要—

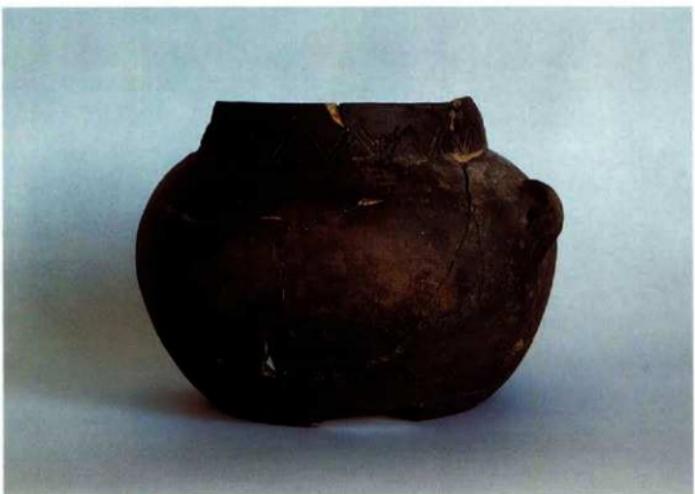
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第443集



遺跡調査番号 9442
遺跡略号 HKT87

1996

福岡市教育委員会



1. 瓦質土器湯釜



2. ベトナム青磁碗



1. 青磁皿



2. 砥未製品



3. 明染付皿



4. 明染付皿

序

福岡市の中心部、天神地区や旧博多部周辺は、ここ数年来再開発ブームを迎え、様変わりしつつあります。この傾向の中で最も大きく変わったことのひとつに、地上から電柱・電線・電話線が姿を消したことがあげられます。電線・電話線の地下埋設工事は、都心部での工事だけに様々な障害があり、一度で完了しませんが、着々と進行しつつあります。

ところで、JR博多駅から築港にいたる旧博多部の地下には、古代以来对外貿易で繁栄した都市「博多」の遺跡が眠っています。福岡市教育委員会では、これまで大小の開発行為に対して、公共・民間の別なく、必要に応じて発掘調査を実施してまいりました。今回、電話線の地下埋設工事で博多遺跡群の冷泉公園に竪坑が掘られることになり、これに先立って発掘調査を行いました。冷泉公園は、周辺のこれまでの調査から、古代末から中世前期には荷揚げの港が、中世後期には、奈良西大寺系律宗の大乗寺があった場所にあたります。本調査では、中世前半期以前の入り江と埋立、中世後半期の様々な造構・遺物が出土しました。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理、報告まで、さまざまな面でご協力をいただいた日本電信電話株式会社九州土木センターならびに日本コムシス株式会社をはじめとする多くの方々に、心から感謝を表します。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 尾花剛

例言・凡例

1. 本書は、電話線地中埋設の到達豊坑建築に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、博多遺跡群第87次調査（福岡市博多区上川端7、冷泉公園地内）の概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図は大庭康時および大庭智子・池田菜穂子が、遺物実測図は大庭康時・井上涼子・上塘貴代子・佐藤信が作成した。製図には、大庭康時・井上涼子・上塘貴代子があたった。
4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準にしている。
5. 本書で報告する遺物については、遺構ごとに通し番号をつけて記述した。遺物写真の番号は、実測図の番号に一致させている。また、胸磁器の実測図中に矢印を書き込んだものがあるが、これは施釉の範囲を示している。
6. 本調査にかかわる遺構写真および遺物写真は、大庭康時が撮影した。
7. 本書にかかわる遺物および記録類の整理には、生垣綾子・今井民代・上塘貴代子・古谷宏子・森寿恵があたった。また、銅鏡の鋸落とし・判読・拓本は、大庭智子による。
8. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収藏・管理・公開される予定である。

| | | | | | |
|--------|-------------------|--------|-------------------|--------|-------------------|
| 遺跡調査番号 | 9442 | | 遺跡略号 | HKT-87 | |
| 調査地地番 | 博多区上川端町7 | | 分布地図番号 | 天神49 | |
| 開発面積 | 100m ² | 調査対象面積 | 100m ² | 調査実施面積 | 100m ² |
| 調査期間 | 1994年10月4日～11月22日 | | | | |

本文目次

| | |
|-----------------|----|
| 第一章　はじめ | 1 |
| 1. 調査にいたる経緯 | 1 |
| 2. 発掘調査の組織と構成 | 1 |
| 3. 遺跡の立地と歴史的環境 | 2 |
| 第二章　発掘調査の記録 | 5 |
| 1. 発掘調査の方法と経過 | 5 |
| 2. 調査地点の基本層序 | 6 |
| 3. 遺構と遺物 | 9 |
| (1) 第1面 | 9 |
| 23号遺構出土遺物 | 10 |
| 60号遺構出土遺物 | 13 |
| (2) 第2面 | 14 |
| 111号遺構出土遺物 | 16 |
| 133号遺構出土遺物 | 18 |
| (3) 第3面 | 19 |
| 204号遺構出土遺物 | 21 |
| (4) 第4面 | 23 |
| 265号遺構出土遺物 | 24 |
| 281号遺構出土遺物 | 27 |
| (5) 中央グリッドの調査 | 28 |
| (6) その他の出土遺物 | 30 |
| 第三章　まとめ | 37 |
| (1) 調査地点の立地について | 37 |
| (2) 道路遺構について | 40 |

表目次

| | | | |
|-----------|----|-------------|----|
| 第1表出土銅錢一覧 | 35 | 第2表　遺構別出土銅錢 | 35 |
|-----------|----|-------------|----|

卷頭図版目次

| | | | | |
|-------|-----------|------------|---------|---------|
| 卷頭図版1 | 1. 瓦質土器湯釜 | 2. ベトナム青磁碗 | | |
| 卷頭図版2 | 1. 青磁皿 | 2. 石硯末製品 | 3. 明染付皿 | 4. 明染付皿 |

挿図目次

| | | |
|---------|------------------------------|----|
| Fig. 1 | 周辺遺跡分布地図 (1/36,000) | 3 |
| Fig. 2 | 第87次調査地点位置図 (1/1,000) | 5 |
| Fig. 3 | 西北壁トレンチ土層実測図 (1/40) | 7 |
| Fig. 4 | 中央グリッド西北壁土層柱状図 (1/20) | 8 |
| Fig. 5 | 第1面遺構全体図 (1/80) | 10 |
| Fig. 6 | 23号遺構出土遺物実測図 (1/3) | 11 |
| Fig. 7 | 60号遺構出土遺物実測図 (1/3) | 13 |
| Fig. 8 | 第2面遺構全体図 (1/80) | 15 |
| Fig. 9 | 111号遺構出土遺物実測図1 (1/3) | 16 |
| Fig. 10 | 111号遺構出土遺物実測図2 (1/3) | 17 |
| Fig. 11 | 133号遺構出土遺物実測図 (1/3) | 19 |
| Fig. 12 | 第3面遺構全体図 (1/80) | 21 |
| Fig. 13 | 204号遺構出土遺物実測図 (1/3) | 22 |
| Fig. 14 | 第4面遺構全体図 (1/80) | 23 |
| Fig. 15 | 265号遺構出土遺物実測図 (1/3) | 25 |
| Fig. 16 | 281号遺構出土遺物実測図 (1/3) | 27 |
| Fig. 17 | 中央グリッド実測図 (1/80) | 28 |
| Fig. 18 | その他の出土遺物実測図 (1/3, 25・26-1/2) | 32 |
| Fig. 19 | 出土銅錢拓影 (1/1) | 36 |
| Fig. 20 | 第87次調査地点と周辺の調査地点 (1/2,000) | 38 |
| Fig. 21 | 砂丘間埋立の推移 | 39 |

写真図版目次

| | | | | | |
|-------|----------------------|----|-------|--------------------|-------|
| Ph. 1 | トレンチ土層堆積状況 (東より) | 7 | Ph.10 | 第4面全景 (南東より) | 24 |
| Ph. 2 | 中央グリッド南西壁堆積状況 | 8 | Ph.11 | 265号遺構 (南東より) | 24 |
| Ph. 3 | 第1面全景 (南東より) | 9 | Ph.12 | 265号遺構出土遺物 (縮尺不統一) | 26 |
| Ph. 4 | 23号遺構出土遺物 (縮尺不統一) | 12 | Ph.13 | 281号遺構 (南東より) | 26 |
| Ph. 5 | 第1面下道路整地層断面 (南東より) | 14 | Ph.14 | 281号遺構出土象嵌青磁 | |
| Ph. 6 | 第2面全景 (南東より) | 14 | Ph.15 | 中央グリッド全景 (南東より) | 29 |
| Ph. 7 | 第3面全景 (南東より) | 20 | Ph.16 | 中央グリッド土層 | 29 |
| Ph. 8 | 208号遺構、獸骨検出状況 (南東より) | 20 | Ph.17 | その他の出土遺物1 (縮尺不統一) | 33 |
| Ph. 9 | 204号遺構出土師器碗 | 22 | Ph.18 | その他の出土遺物2 (縮尺不統一) | 34 |

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

1993年11月26日、日本電信電話株式会社九州土木センター（以下、NTTと略す）から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区上川端7に関する埋蔵文化財事前調査願いが提出された。申請地は、中世の国際貿易都市として知られる博多遺跡群の西線にあたり、周辺の発掘調査からも遺跡の存在が予想される地点であった。

NTTから出された開発内容は、第一種電気通信事業用到達立坑築造で、電話線の地下埋設とともに工事であり、大深度の掘削が不可欠な内容であった。したがって、埋蔵文化財課では、発掘調査が必要と判断、NTTに対しその旨を返答し、調査を前提とした協議に入った。

一方、申請地の現況は、福岡市都市整備局が管理する冷泉公園の一隅であり、ここに到達立坑をつくることに関して許可がなかなか下りず、調査工程が組めない状態となつた。そこで、埋蔵文化財課では、近接する博多区店屋町で博多遺跡群第85次調査に入っていた大庭康時を担当とし、調査工程が固まり次第、第85次調査と平行して調査を実施することにした。

結局、都市整備局の許可は、NTTの工事期限ぎりぎりになって下りたため、急遽発掘調査に入ることになり、1994年10月3日に冷泉公園の現地で打ち合わせを持ち、翌10月4日に重機で表土を除去、調査を開始した。

2. 発掘調査の組織と構成

| | | | |
|------|---|-----------------------|-----------------------|
| 調査委託 | 日本電信電話株式会社九州土木センター | 所長 | 平木邦彦 |
| 調査主体 | 福岡市教育委員会 | 教育長 | 尾花 剛 |
| 調査統括 | 同 埋蔵文化財課 | 課長 | 折尾 学（前任） 荒巻 麗勝（現任） |
| | | 第二係長 | 山口謙治 |
| 調査庶務 | 同 第一係 | 吉田麻由美（前任） 西田結香（現任） | |
| 調査担当 | 同 第二係 | 大庭康時 | |
| 調査作業 | 安部しのぶ 池田菜穂子 石川君子 江越初代 大庭智子 小野博子 岸本祥子 北垣義克 渋村和憲 関加代子 関義種 背根崎昭子 橋本伸一 中山登樹 能丸勢津子 花田克子 藤原孝一郎 村崎祐子 百津等 山田美樹 | | |

このほか、発掘作業に関わる諸条件の整備・調査中の便宜については、NTTおよび日本コムシス株式会社（工事長 江崎博幸氏）よりご協力をいただいた。さらに、折から発掘調査中であった博多遺跡群第85次調査の委託者である三井不動産株式会社には、調査途中であるにも関わらず、本調査に手をさくことをご快諾いただいた。記して、謝する次第である。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄海灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川(那珂川)、東は江戸時代に開墾された石堂川(御笠川)、南は石堂川開墾以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川(御笠川)によって囲まれる。

この御笠川と那珂川にはさまれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡がならぶ地域でもある。上流側から著名なものをあげると、奴国の中心地であり、奴国王墓も発見された須玖岡本遺跡を中心とする一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が多量に出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られる板付遺跡、弥生時代の青銅器鋳造地のひとつである那珂遺跡、弥生時代後期の環濠群や網で巻いた銅劍が豪華より出土した比恵遺跡など、ほぼ直線上にならんでいる。博多遺跡群で調査されている弥生時代中期・後期の集落・豪華墓群は、これら諸遺跡の延長線上で理解できるだろう。さらに、そのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴國王」金印出土遺跡にあたる。弥生時代中期に、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動の拠点集落として位置づけられる。5世紀後半に築かれたとされる博多1号墳(前方後円墳、推定墳丘長60m)も、那珂川右岸に腹開する一連の前方後円墳の首長墓の流れの中で考えられよう。6世紀後半には、那の津官家が設置される。その推定位置については、福岡市南区三宅が当てられてきたが、1984年比恵遺跡で横列に埋められた倉庫群が発見されるによよんでこれを官家にあてる説が浮上してきた。同様の、横列に埋められた倉庫群は、早良区有田・小田部遺跡群でも複数検出されており、その性格・実態についてはいまだ定まった評価をあたえられていないが、これらの地域が、有力な地位を保っていたことを示している。

律令時代にはいると、御笠川の最上流に大宰府がおかれて、九州の政治・軍事的中心地となる。博多湾岸には、博多遺跡群とは入り海ひとつを隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館がおかれた。博多遺跡群に官衙がおかれた記録はないが、石帶・銅製帶金具・墨書須恵器・須恵器鏡・皇朝鏡・鴻臚館式瓦・老子式瓦などが出土しており、律令官人の存在が推定できる。

平安時代後半になって律令体制が弛緩すると、対外貿易も京都の中央政府の直接的掌握から、大宰府を通じての管理へと変質する。これが、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらしたであろうことは、想像に難くない。こうした流れの中で、11世紀には、博多に宋商人の居留が知られるようになる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半になってからで、膨大な量の輸入陶磁器が出土している。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけて、聖福寺・承天寺の二人禪割が博多綱首(博多在住宋商人)の後押しの元で、相次いで建立され、急速に都市化が進行したと見ることができる。

鎌倉時代、2度にわたる元寇で博多付近は戦場になるが、13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地というのみではなく、九州の政治的中心地という面も持つにいたる。遺構の上では、13世紀末から14世紀初めにかけて、あちこちに道路がつくられており、それらは戦国時代まで続いている。これらの道路は、必ずしも相互に規則性・統一性を持ってはいないが、中世後半を通しての博多の街区・景観はここにつくられたと言えよう。

南北朝時代頃から、博多の海岸部にある息浜の勃興・発展が著しく、博多の繁栄の中心は、内陸側の博多浜から、息浜へと移る。息浜商人らは、中国大陆の元・明のみならず、高麗・朝鮮、さらには琉球・東南アジアにまで進出して、貿易を行った。博多遺跡群からは、タイやベトナムの陶磁器が出土しており、これを裏付けている。また、この時代の民間貿易は、海賊である倭寇によって扭われ



Fig. 1 周辺遺跡分布地図(1/36,000)

1. 博多遺跡群 2. 同 87 次調査地点 3. 姪摺遺跡群 4. 吉塚本町遺跡 5. 古坂本町遺跡
6. 雷崎遺跡群 7. 席田青木遺跡 8. 鶴居遺跡 9. 比恵遺跡群 10. 那珂遺跡群 11. 那珂君体遺跡 12. 板付遺跡
13. 諸間B遺跡 14. 許岡A遺跡 15. 五十川高木遺跡 16. 井尻遺跡群 17. 三宅魔寺

た一面もあり、博多にも倭寇の存在が記録されている。

一方、南北朝時代、足利尊氏によって博多に九州探題がおかれたが、九州では後醍醐天皇をいたぐる南朝方や、反尊氏である足利直冬の勢力が強く、探題の政治力・軍事力は強力なものとはなりえなかった。歌人としても知られる探題今川了俊のもとでは、南朝勢力は圧倒され、了俊は博多にあって朝鮮貿易などに積極的に乗り出す。しかし、了俊のこのような勢威は、將軍足利義満の不興を買い、了俊は探題の任を解かれ、九州を去る。その後、博多は筑前の少弾氏、豊後の太田氏、周防の大内氏らによる争奪の対象となっていました。室町時代後半の博多は、堺とならんで自治都市として著名だが、たびたび兵火にかかる焼けている。

1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏の軍によって焼かれ、灰塵に帰す。翌年、島津氏を逐って九州平定を遂げた豊臣秀吉は、博多の復興を指示した。これがいわゆる太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以来続いた博多の諸道路、街区は廃される。太閤町割は、それまで町のあちこちで異なっていた道路の方向や街区を統一し、博多全体を長方形街区と短冊型地割りで仕切るものであった。こうして、中世都市博多は近世都市に生まれ変わった。

太閤町割と豊臣秀吉の朝鮮出兵によって、博多は再びよみがえる。しかし、江戸時代にはいり、鎮国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幕をおろした。そして、黒田氏52万石の城下町福岡と対をなす商人町博多として福岡藩の藩都となり、そのまま明治維新を迎えたのである。

参考文献

- 磯原・下山正一・大庭康時・池崎謙二・小林茂・佐伯弘次 1991 「博多遺跡群周辺における遺跡形成環境の変遷」
『日本における初期弥生文化の成立』 横山浩一先生退官記念事業会
- 大庭康時 1992 「中世都市遺跡の調査＝博多」『季刊考古学』第39号 雄山閣
- 1995 「大陸に開かれた都市 博多」 綱野善彦・石井進編『中世の風景を読む－七 東シナ海を囲む中世世界』 新人物往来社
- 亀井明徳 1986 「日本貿易陶磁史の研究」 同朋社
- 川添昭二 1975 「鎌倉時代の对外関係と文物の流れ」『岩波講座日本歴史6 中世2』岩波書店
- 1987 「鎌倉中期の对外関係と博多－承天寺の開創と博多御首謝國明一－」『九州史学』87・88・89合併号
- 1988 「鎌倉初期の对外関係と博多」翁内健次編『領国日本と国際交流』上巻 古川弘文館
- 川添昭二編 1988 「よみがえる中世（-）東アジアの国際都市博多」 平凡社
- 佐伯弘次 1987 「中世都市博多の発展と息浜」『日本中世史論次』 川添昭二先生還暦記念会
- 1993 「中世の博多袖浜をめぐって」『法哈壁』第2号 博多研究会
- 堺市博物館 1993 「博多と堺」展図録
- 博多研究会編 1992～ 「法哈壁」1～3号
- 福岡市博物館 1992 「堺と博多」展図録
- 宮本雅明 1989 「空間志向の都市史」 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門1 空間』東京大学出版会
- 森克己 1975 「新訂日宋貿易の研究」 国書刊行会

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

博多遺跡群は、調査地点によって若干の差異はあるものの、おおむね古代から近世、さらには現代まで続く複合遺跡である。通常、これらの時代を異にする遺構は、厚い包含層の中に重層的に残っており、本調査地点においても、同様の状況が予想できた。そこで、重機によって、近・現代の擾乱層を除去した後、トレンチを設けて土層を検討し、それに応じて遺構検出面を設定、人力によって掘り下げ、遺構調査を繰り返して自然地形面まで掘り下げるにした。

なお、調査区は10メートル四方で、周囲を鋼矢板で囲むが、現地表下120センチで地中染を入れるために、深さ250センチ前後で調査を中断し、地中染工事が入ることになった。

調査作業の経過は、次の通りである。

10月4日 バックホーで表土除去。ベルトコンベア一搬入。

10月5日 第1面遺構検出

10月6日 第1面遺構調査。冷泉小学校の基準点からレベル移動。グリッド基準点設定。

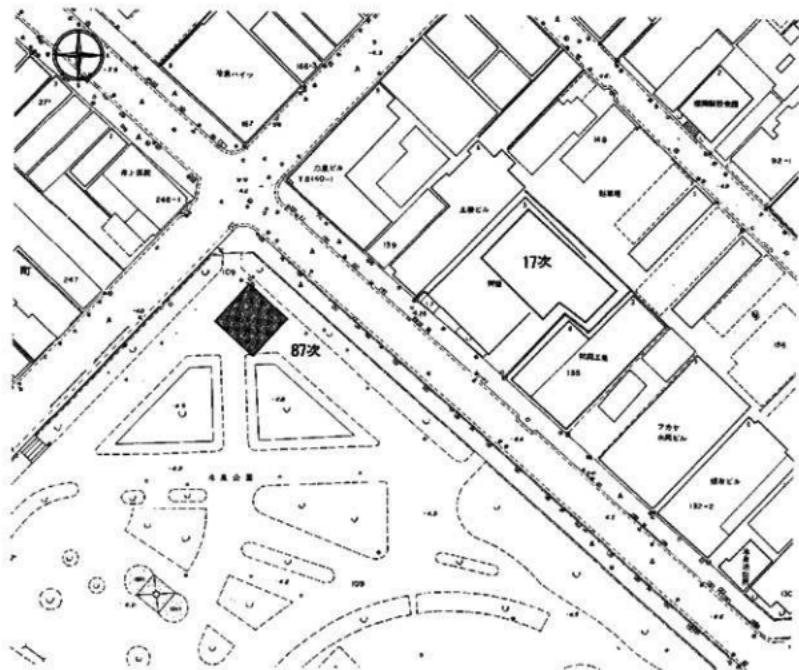


Fig. 2 第87次調査地点位置図(1/1,000)

- 10月7日 第1面造構調査。残土搬出。
- 10月11日 第1面造構調査。清掃。全景写真撮影。造構実測。
- 10月12日 作業員を第85次調査現場におくり、造構実測。
- 10月13日 西辺にそってトレーニング設定。トレーニング壁で観察できた、灰色砂質土（下面は硬化）を目安に掘り下げる。
- 10月14日 第2面への掘り下げ終了
- 10月17日 第2面造構検出。北壁付近から細かい単位の整地層を検出。第2面から、第1面にかけての、道路の整地層と推定される。第2面造構調査開始。トレーニング土層写真撮影。
- 10月18日 第2面造構調査。北壁の道路造構断面を写真撮影。
- 10月19日 第2面調査。清掃。全景撮影。トレーニング土層実測。実測の基準杭を調査区外に逃がす。
- 10月20日 第2面実測。トレーニング土層実測。
- 10月24日 第2面実測。トレーニング内で検出した礎石のレベルに合わせ、第3面を設定、掘り下げにかかる。日本コムシスから、26日より地中染工事をしたい旨連絡あり。了承する。
- 10月25日 第3面への掘り下げ。地中染工事のため、調査区内を片付ける。
- 10月26日～31日 日本コムシス地中染工事。この間、調査中止。
- 11月1日 第3面への掘り下げ。
- 11月2日 掘り下げ。第3面造構検出。造構調査に取りかかる。
- 11月4日 第3面造構調査。トレーニング掘り下げ。
- 11月7日 第3面造構調査。清掃。写真撮影。
- 11月8日 第3面実測。
- 11月9日 第3面実測。
- 11月10日 トレーニングで確認した白色粗砂面を第4面とし、掘り下げ。
- 11月11日 第4面への掘り下げ。造構検出。造構調査。
- 11月12日 第4面造構調査。
- 11月14日 第4面造構調査。午前10時頃から雨になり、作業中止。
- 11月15日 第4面造構調査。清掃。写真撮影。
- 11月16日 第4面実測。
- 11月17日 第4面実測。トレーニングでの観察では、第4面より下層には造構は認められなかつたが、下位の土層の確認のため、調査区中央に4メートル四方のグリッドを設定。掘り下げる。
- 11月21日 中央グリッドを湧水レベルまで掘り下げる。写真撮影。実測。トレーニング実測。
- 11月22日 中央グリッドに十文字にトレーニングを設定。掘り下げを試みるが、湧水による崩壊のため20センチほど下がった粗砂層の上面で止め、以下はボーリングステッキで探るにとどめる。中央グリッド西壁・南壁土層実測。
- 調査器材をすべて第85次調査現場に撤収。第87次調査終了。

2. 調査地点の基本層序

本調査地点では、通例博多遠跡群の基盤となっている砂丘砂層は認められなかつた。過去の調査では、本調査地点の東に近接する第14次調査地点において、すでに砂丘が落ち込んでいることが確認されており、それを追認する結果となつた。堆積土の詳細は、Fig. 3 およびFig. 4 にゆずるとして、ここ

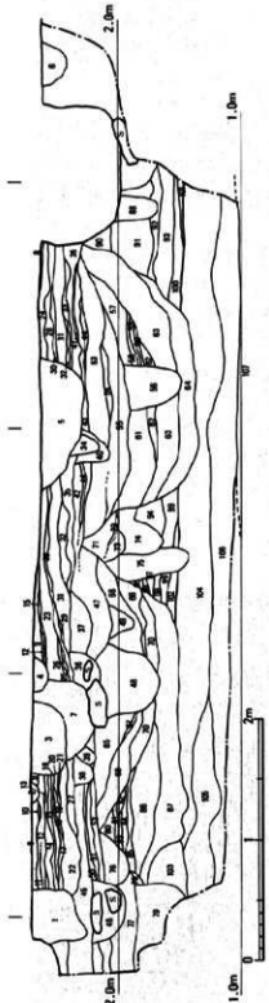


Fig. 3 西北壁トレンチ土層実測図(1/40)

- 1 油土または灰白色土
2 灰土過渡じり灰白色土
3 灰土
4 灰褐色土
5 灰褐色土
6 灰褐色土
7 灰褐色土
8 灰褐色土
9 灰褐色土
10 灰褐色土
11 土
12 灰褐色土
13 灰褐色土
14 灰褐色土
15 灰褐色土
16 灰褐色土
17 灰褐色土
18 灰褐色土
19 灰褐色土
20 灰褐色土
21 土
22 灰褐色土
23 灰褐色土
24 灰褐色土
25 土
26 灰褐色土
27 灰褐色土
28 灰褐色土
29 灰褐色土
30 灰褐色土
31 灰褐色土
32 灰褐色土
33 灰褐色土
34 灰褐色土
35 灰褐色土
36 灰褐色土
37 灰褐色土
38 灰褐色土
39 灰土
40 灰白色土
41 灰褐色土
42 灰褐色土
43 灰褐色土
44 灰褐色土
45 灰褐色土
46 灰褐色土
47 灰褐色土
48 灰褐色土
49 灰褐色土
50 灰褐色土
51 灰褐色土
52 灰褐色土
53 灰褐色土
54 灰褐色土
55 灰褐色土
56 灰褐色土
57 灰褐色土
58 灰褐色土
59 灰褐色土
60 灰褐色土
61 灰褐色土
62 灰褐色土
63 灰褐色土
64 灰褐色土
65 灰褐色土
66 灰褐色土
67 灰褐色土
68 灰褐色土
69 灰褐色土
70 灰褐色土
71 灰褐色土
72 灰褐色土
73 所有地盤上
74 黄灰褐色土
75 黄褐色土
76 喀斯特土
77 灰褐色土
78 灰褐色土
79 灰褐色土
80 灰褐色土
81 灰褐色土
82 灰褐色土
83 灰褐色土
84 灰褐色土
85 灰褐色土
86 灰褐色土
87 灰褐色土
88 灰褐色土
89 灰褐色土
90 灰褐色土
91 灰褐色土
92 灰褐色土
93 灰褐色土
94 灰褐色土
95 灰褐色土
96 灰褐色土
97 白色砂
98 灰褐色土
99 白色砂
100 灰褐色土
101 過渡地帯
102 灰褐色土
103 白色砂
104 灰褐色土
105 灰褐色土
106 白色砂
107 灰褐色土



Fig. 1 トレンチ土層構造状況(東より)

では、その概略を説明しておく。

本調査で検出した最下層は、標高約0.4メートル以下で検出した白色粗砂層である。これは、博多遠跡群の基盤となる淡黄色砂層とは異なる。これ以下については、湧水のため掘り下げることができず、ボーリングステッキによる確認を試みた。ボーリングステッキでも、引き抜く際に水で洗われるため、砂層のサンプルを引き上げることはできなかった。しかし、刺し込んだ感触では、粘質土と砂層が交互にあるようで、柔らかく抜けたり、固く噛み込んだりした。なお、ボーリングステッキで探りえた深さ(1メートル)では、基盤砂層(淡黄色砂層)は見あたらなかった。

標高約0.4メートルの白色粗砂層から標高約1.5メートルの間は、若干の変化はあるものの砂層が、それぞれ20センチほどの厚さを持って、水平方向に堆積する。ただし、各層の上面はゆるく波打っている。また、Fig.4の5層・8層にみると、砂層中に傾斜を持った堆積が認められ、流れに洗われた環境での堆積が想定される。

さらに標高約1.5メートルから1.8メートル前後までは、厚さ5センチ前後の砂質土の水平方向の堆積が続き、このレベルまでは自然環境のもとで埋積が進んだことを示している。ただし、1.5メートル付近には、部分的ではあるが黒色の粘土層も見られ、その上下で堆積環境に大きな違いが認められる。前者は移動のある水域での堆積、後者は滞水域での堆積と考えることができよう。あるいは、後者の一部を人為的な整地層と見ることもできるかもしれない。なお、標高1.7メートル前後の面は、第4造構造面(以下、第4面と略す。他の造構造面についても同様)に当たる。

第4面から標高2.7メートル前後の第1面までは、中世の生活層であり、多量の遺物を含んだ人為的な層が堆積する。この間の堆積は煩雑を極め、厳密な意味での分層発掘を困難なものにしている。

第1面から、現地表である標高4.5メートル前後までが、近世以降の層であり、発掘調査に当たっては重機で事前に除去した部分に当たる。

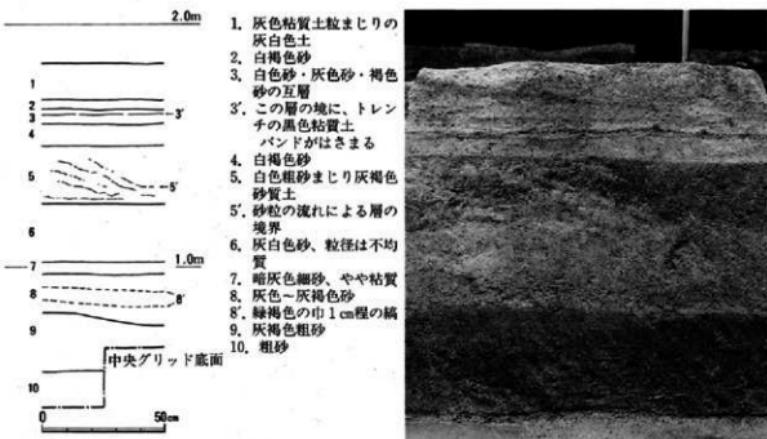


Fig.4 中央グリッド西北壁土層柱状図(1/20)

3. 造構と遺物

以下、各検出面ごとに造構・出土遺物について略述する。造構は、基本的に造構番号順に記す。造構番号は、第1面より、検出した順につけた。したがって、造構の種類に関わらず、通し番号になっている。

(1) 第1面

重機による表土すき取り後の面である。すき取りに際しては、黄灰色粘土層の上面を目安にし、すき取り足りなかった部分については、人力で除去した。標高では、2.75メートル前後にあたる。

第1面とした黄灰色粘土層は、調査区の矢板際を除いたほぼ全面に分布しており、整地面と推定される。トレーナーでの土層実測図によれば、第1面の黄灰色粘土層は南側でゆるく下降しているが、調査にあたっては、これを認識し、平面的に掘り分けることはできなかった。このように、部分的に問題は残したもの、おむね单一の整地面と考えて良かろうと思う。

第1面においては、井戸・土坑・柱穴・溝などを調査した。7号造構・9号造構・24号造構・25号造構・47号造構・63号造構などは、近世以後の井戸であり、中世の井戸は検出されていない。土坑は、ほとんどが廃棄土坑と考えられる。1号造構・5号造構・17号造構・35号造構・41号造構・46号造構・50号造構は、近世以後の土坑である。21号造構・23号造構・39号造構・58号造構・59号造構・60号造構・61号造構・65号造構・67号造構・69号造構などの土坑は16世紀代に属する。

溝では、雨落ち溝状の小溝を2条検出したが、時期の決め手を欠く。柱穴では、4号造構・52号造



Ph.3 第1面全景(南東より)

構が近世、3号遺構・29号遺構が16世紀代であるほかは時期を限定できなかった。

この他、柱穴や礎石から建物のプランが推定できるが、不確実なものであり、遺構全体図中に実線で推定復元案を示すことにとどめる。

以上の遺構の年代観からみて、第1面の時期は16世紀であり、より上層から掘り込まれた近世以後の遺構が混在しているものと考えられる。

次に、代表的な遺構出土遺物を示す。

23号遺構出土遺物 (Fig. 6, Ph. 4)

23号遺構は、調査区の北東側で検出した、140×120センチの略方形の土坑で、深さは約45センチをはかる。近世以後の井戸である、24号遺構・25号遺構に切られている。

1~14は、土器類である。1~11は皿で、器形・法量から3種類に分類できる。1~4は、口径6.0~6.3センチ、器高1.1~1.5センチをはかる。5は浅皿で、口径7.5センチ、器高1.0センチである。6~11は、口径に対して器高が高いグループで、器肉も厚い。口径6.1~6.6センチ、器高1.5~1.9センチをはかる。2の口縁には、油煙が付着しており、灯明皿として用いられたことを示している。12~14は、壺である。体部は外反し、口縁内面に小さく段をつくる。口径10.4~10.8センチ、器高2.1~2.2

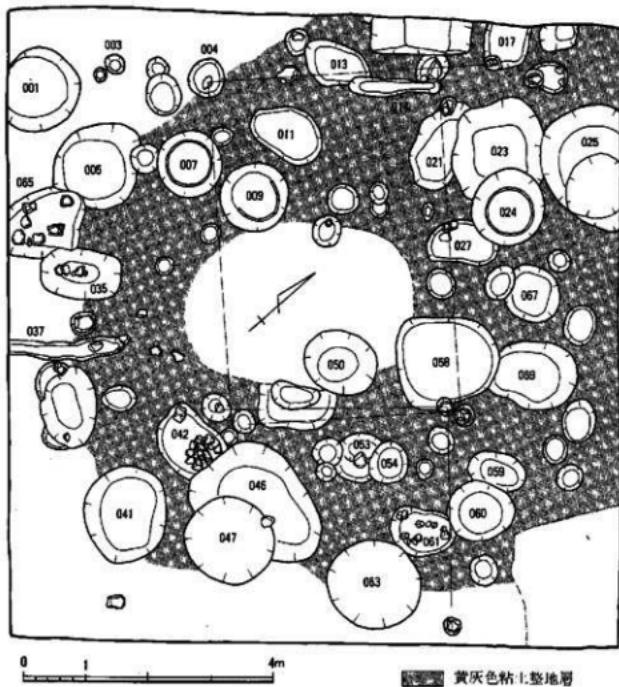


Fig. 5 第1面遺構全体図(1/80)

センチをはかる。これらの土師器は、すべて底部を回転糸切りする。内底部には、基本的にナデ調整を行わないようで、2と7の内底中央にわずかなナデ調整がみられるにすぎない。

15・16は、青磁である。15は、景德鎮の皿で、全体を花弁形につくる。全面に灰緑色の釉をかけるが、外底部は、青みを帯びた白色の釉を施している。豊付きは、釉を搔きとって、露胎とする。胎土は、白色できめが細かい。16は、同安窯系の碗であろう。淡緑色の釉を、高台外側までかける。高台から外底部は露胎だが、焼けて黒変している。17は、明代の染付の皿である。底部は基筒底につくり、豊付きは露胎とする。ややくすんだ青白色の透明釉に、藍色の染め付けを描く。底部の露胎部分は、焼けて黒変する。18・19は、白磁である。18は、豊付きの釉を搔き取って、露胎とする。19は、小片であり、はっきりしないが、輪花状に口縁の一部をへこませている。20は、朝鮮王朝の白磁である。淡灰色できめの細かい胎土に、うすく緑味をおびた灰色の透明釉を施す。高台から体部外面は露胎となる。見込みには、3カ所の胎上目と1カ所の剥離が、高台豊付きには、4カ所の剥離が重ね焼きの

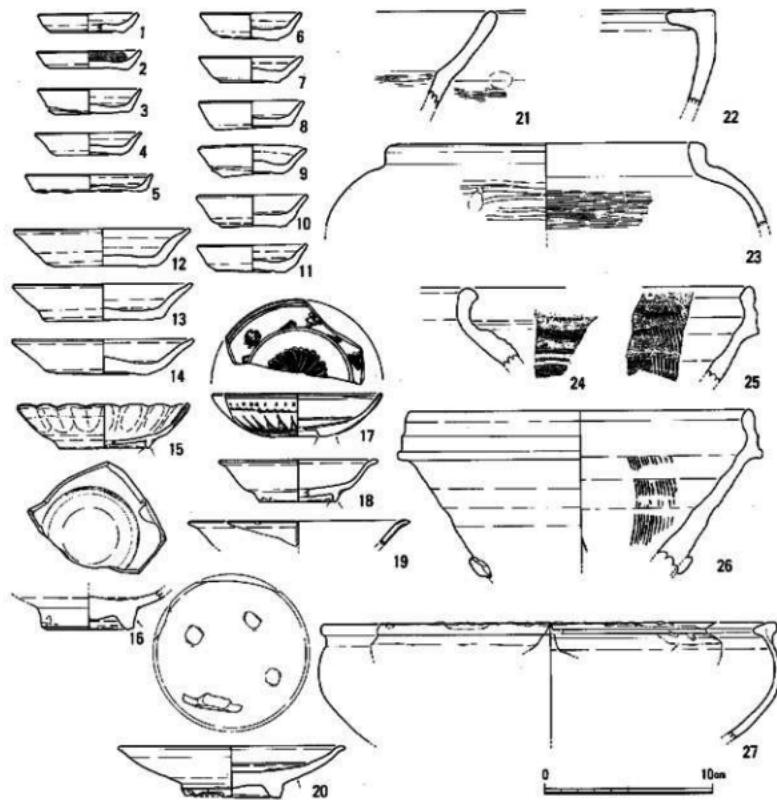
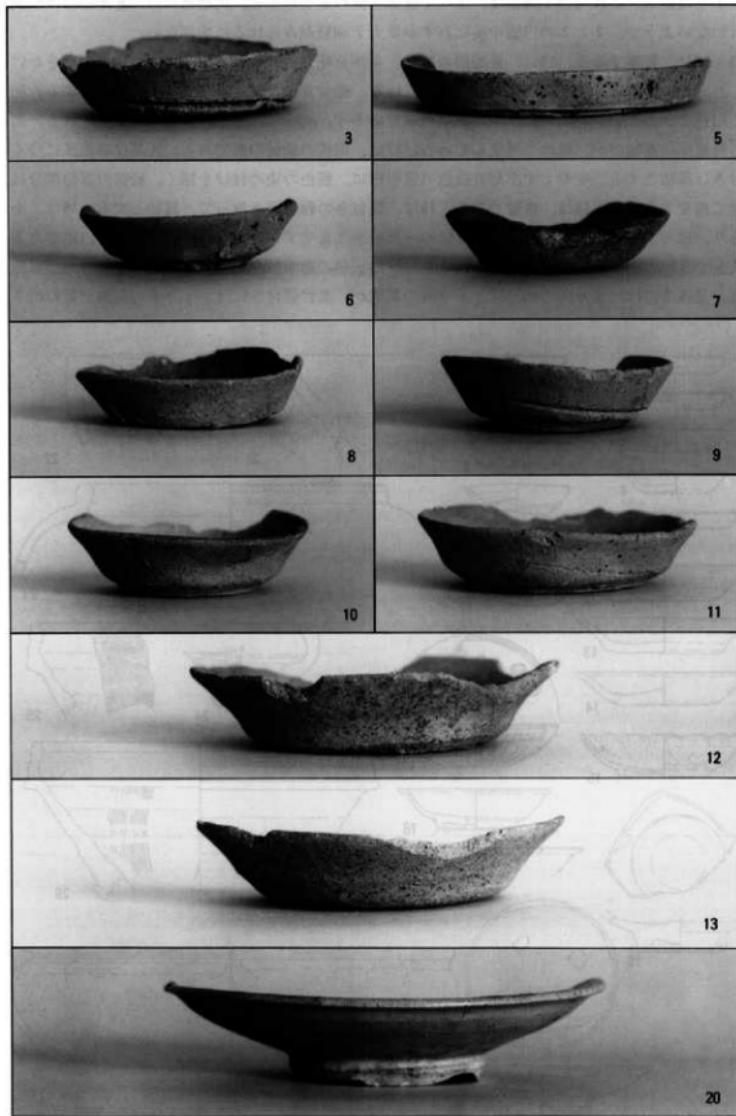


Fig. 6 23号造構出土遺物実測図(1/3)



Ph.4 23号遺構出土遺物(縮尺不統一)

痕跡として残る。

21は、土師器の土鍋である。内外面とも、横方向の刷毛目調整を施す。外面には、煤が付着している。22・23は、瓦質土器である。22は、火舎の口縁部である。内外面は、丁寧にヘラ磨きされる。23は、甕である。口縁部の内外は横ナデ調整、体部外面は横方向のヘラ磨き、体部内面は横位の刷毛目調整を行う。

24～26は、備前陶器である。24は壺、25・26は搗り鉢である。

27は、輸入陶器の鉢である。折り返した口縁の上面から内面にかけて、黒褐色の釉を施す。胎土は鼠色で、小穂・砂粒・黒粒など混ざり物が多く粗い。口縁の外端部には、重ね焼きの白砂が付着する。

このほか、紹聖元寶（1094年初鋤）1枚が出土している。

以上の出土遺物から、23号造構の年代としては、16世紀前半が与えられよう。

60号造構出土遺物 (Fig. 7)

60号造構は、調査区の南東部で検出した、長軸108センチ、短軸96センチの卵形を呈する土坑で、深さは約30センチをはかる。

1～4は、土師器である。1～3は皿で、口径6.0～6.2センチ、器高1.15～1.25センチをはかる。皿には、すべて内底ナデ調整と、外底部の板目压痕が認められる。1の口縁には、わずかに油煙の付着がみられる。4は、壺である。体部は、ゆるくS字状に渦曲して、口縁は外反気味におさめる。口径10.0センチ、器高2.3センチである。これらの土師器は、外底部を回転糸切りする。

5・6は、明代の染付である。5は、小碗である。全面に施釉するが、豊付きは釉を搔き取って露胎とする。わずかに青みを帯びた透明釉に、藍色の染め付けを行う。高台の内側には、「大明年造」の銘を書く。6は、碗である。口縁の直下に雷文帯を巡らせる。おそらく、饅頭心型の底部になろう。7は、青磁の碗である。退化した蓮弁文が施される。8・9は、白磁の皿である。ともに豊付きの釉を搔き取って、露胎とする。9の豊付きには、白砂が付着している。

10は、瓦質土器のこね鉢である。内面は、摩耗してなめらかになっている。外面は、特に調整痕が見えないが、ナデ調整であろう。小片のため、復元口径は不確実である。

11は、備前陶器の搗り鉢である。口縁の上面と、口縁直下の体部外面に、重ね焼きによる剥離が見られる。

60号造構の年代としては、16世紀中頃を考えるのが、妥当であろう。

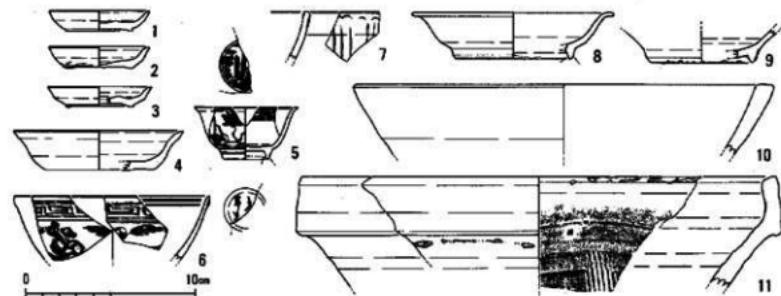


Fig. 7 60号造構出土遺物実測図(1/3)

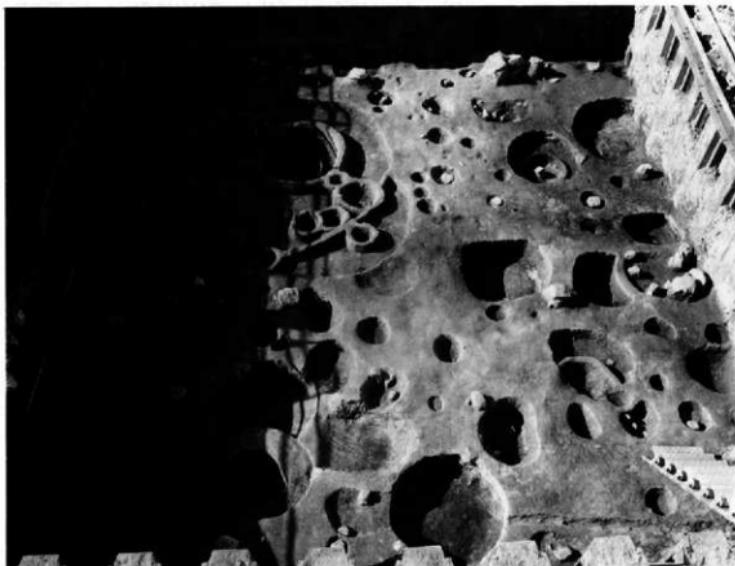
(2) 第2面

トレッセで確認した黄灰色粘土層、およびこれに相当する層（白色粘土層など）で設定した透構検出面である。標高2.35メートル前後に当たる。

第1面からの掘り下げに際して、調査区の北西角付近で、硬化した砂質土の細かい互層がみられた。不注意にも振り抜いてしまったが、調査区北辺の土層の検討、および過去の発掘調査の経験からみて、道路の整地層であることはほぼ間違いない。掘り下げ時の調査日誌のメモから、その分布はFig. 8で網をかけた部分に当たり、南西から北東方向にのびる道路である。第2面は、この道路がここを通る直



Ph.5 道路整地層断面(南東より)



Ph.6 第2面全景(南東より)

前の生活面と考えられる。

第2面では、井戸・土坑・柱穴・溝が検出された。111号造構は、16世紀代の井戸である。116号造構・117号造構・133号造構・144号造構は16世紀代の廐業土坑。129号造構は15世紀代の柱穴である。このほかの造構は、時期を限定するだけの資料を欠くが、少なくとも、近世以後の遺物は出土していない。145号造構は、素掘りのV字溝である。検出面上においては、調査区中程から東にのびているが、底面のレベルを見ると、東から中央部にかけて浅く上がっており、第1面63号造構に切られた西側では、第2面のレベルは切られる直前の溝底のレベルよりも若干ながら低くなっている。したがって、145号溝は、本来まっすぐに西までのびていたものと考えられる。出土遺物はないが、第1面よりも下位で検出しているから、16世紀代と見て大過ないだろう。

この他、柱穴や礎石から建物のプランが推定できるが、不確実なものであり、造構全体図中に実線で推定復元案を示すにとどめる。

第2面の年代観としては、この面で検出した造構に15世紀代に属するものがあることから、15世紀と見るのが妥当であろう。ただし、検出した造構のかなりの部分が、16世紀代に含まれるようである。

次に、代表的な造構出土遺物を示す。

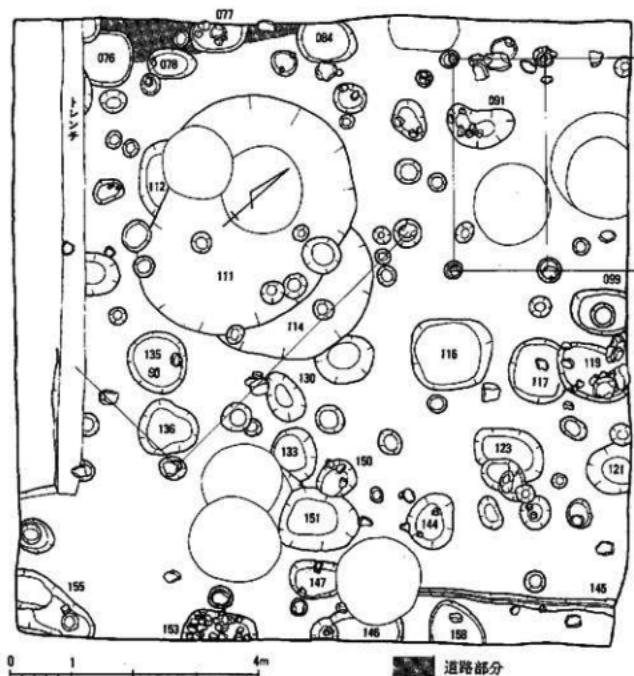


Fig. 8 第2面造構全体図(1/80)

111号造構出土遺物 (Fig. 9, 10)

111号造構は、調査区中央から北西より検出した井戸である。長径390センチ、短径310センチの梢円形を呈する。175センチほど掘り下げた標高0.65メートルほどで湧水にあい、以下の掘り下げを断念したが、井側は検出できていない。

1~12は、土師器である。口径7.0~8.8センチで、法量分布から特に集中する数値は認められない。また、器形からみても、底部から断面三角形の体部が立ち上がるるもの(1~4)、直線的な体部が高く開くものの(6)、小さな体部が浅く真上に向かって立ち上がるもの(4~7)、比較的小さな底部から屈曲部を持って内湾する体部が立ち上がるもの(5)などバラエティーに富んでいる。2・3には、口縁に油煙の付着がみられ、灯明皿として使われたことがわかる。8~12は、坏である。8・9は、きわめて薄手の体部破片で、内外面とも強い横ナテ痕跡をとどめる。胎土は、黄灰色を呈し、きめ細かく精良である。山口県の大内氏関連造跡で出土するタイプの土師器と共に通しておらず、この地域から搬入された可能性が高い。なお、8には内外ともに墨書が見られる。小片のため明かではないが、戲画の類ではないかと思われる。10~12は、在地の坏である。口径の小さい10と、大口径の11・12とに分かれる。10は、口径10.2センチである。口縁の内面が小さく内湾して段をつけており、形態的には第1面23号造構出土の土師器坏に共通する。11・12は、口径13.4~13.6センチ、器高2.5センチをばか

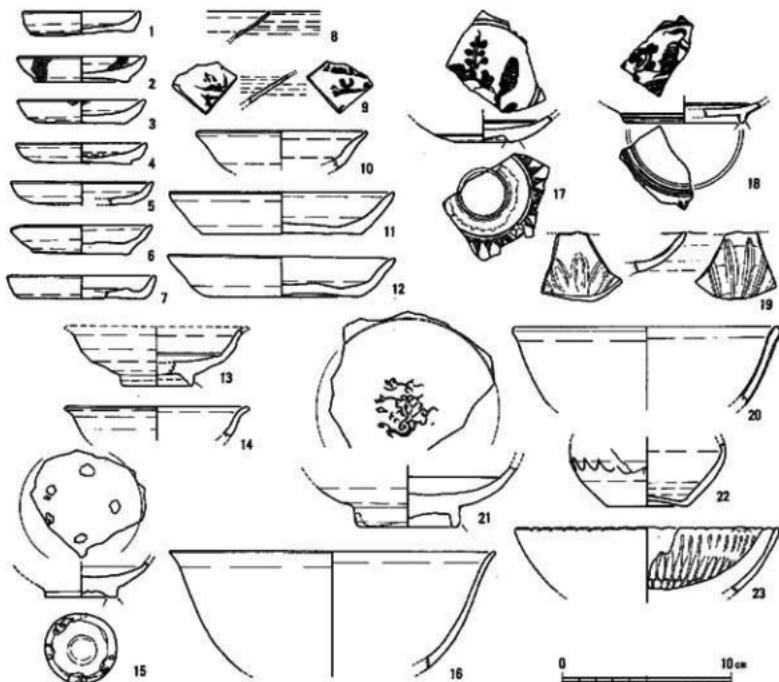


Fig. 9 111号造構出土遺物実測図(1/1)

る。これら土師器の皿・壺は、底部を残すもので見る限り、すべて回転糸切りであり、外底部に板目圧痕、内底にナデ調整を施す。

13～16は、朝鮮王朝の磁器である。13・14は灰釉磁の皿である。同一個体の可能性もある。胎土は淡灰色を呈し、細かい気孔が若干見られる。また、微細な黒粒・白粒を含んでいる。釉は、わずかに緑色を帯びた灰色の透明釉で、高台疊付きの外側から外底部は露胎にする。15・16は、白磁である。15は、おそらく碗になろう。白っぽい黄褐色の胎土に、少しくすんだクリーム色の釉を施す。全面施釉だが、疊付きは露胎となる。見込みと疊付きには、5カ所の砂目が残る。16も碗である。黄味を帯びた淡灰色のきめ細かい胎土に、灰色を帯びた半透明釉を薄く施す。釉には、細かい氷裂がみられる。小片のため、口径は若干不確実である。

17・18は、明代の染付の皿である。17は、底部を基筒底につくる。青みを帯びた白色の釉に、濃い

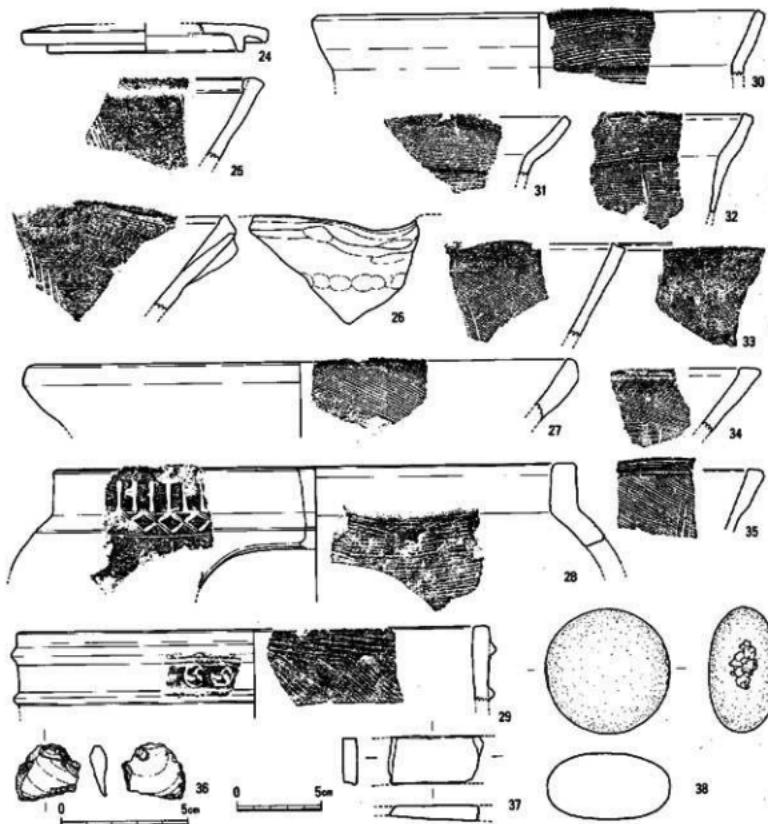


Fig. 10 111号造構出土遺物実測図2(1/3)

藍色の染め付けを施す。疊付きは、露胎となる。胎土は灰白色で、気孔が多く、きめはやや粗い。**18**は、輪高台につくる。青みを帯びた白色の釉に、くすんだ藍色の染め付けを施す。釉の表面には、ツヤがなく、水裂が認められる。疊付きは露胎となるが、細かい砂が付着している。**19~21**は、青磁である。**19**は、皿である。うすい肌色の胎土に、淡緑色の透明釉をかける。ガラス光沢が強く、釉中に気泡や氷裂が見られる。口縁は面取りをして、輪花にしているようである。体部は、内面は指様のもので、外面は箆先状の工具でくぼませ、花弁形につくる。生産地不明。**20・21**は、碗である。灰色の胎土に、緑色の不透明釉を厚めにかける。**21**は、疊付きから外底部を露胎にする。**22**は、黄褐色陶器の壺である。胎土は、灰褐色できめが細かいが、径1ミリほどの砂粒や白砂粒が混じる。釉は、黄褐色～暗緑黄色で、透明感はない。外面は、体部から底部まで全面に施釉し、体部の下位には施釉後波状文を線刻している。

23は、ベトナム青磁の碗である（巻頭図版1）。Fig.18~19に図示した底部と同一個体と考えられる。復元した全形は、Fig.18~19の下に示す。淡茶色で、やや軟質の感がある胎土に、灰黄緑色の半透明釉をかける。型造りで、菊弁状につくる。

24~29は、瓦質土器である。**24**は、蓋である。内外面とも、横ナデ調整する。**25・28**は、摺り鉢である。**25**は、口縁の内面に粘土帯を貼り付け、断面三角形に肥厚させる。体部内面は、使用のため小球状に剥離している。内外面とも横ナデ調整する。**28**は、口縁の一部を外方に曲げ、片口につくる。内面は横刷毛調整、外面は指押えする。**27**も鉢であるが、摺り口は刻まれていないようである。**28**は、風炉である。体部を大きくくりぬいて、窓をあけている。体部外側はヘラ磨き、内面は刷毛目、口縁は横ナデ調整する。**29**は、火舎である。口縁直下の2条の突審の間に、巴文のスタンプを押す。外面は横ナデ、内面は目の粗い刷毛目調整する。

30~32は、土師器の土鍋である。内面は、横方向の刷毛目調整し、外面には煤が付着している。**33~35**は、土師質土器の摺り鉢である。**33**は、内外面とも刷毛目調整する。**34**の外面は、口縁部付近で横ナデ調整、以下は特に調整痕が見られず、粗くナデ調整されたものと思われる。**35**の外面は、指および掌で押さえている。

36は、黒曜石の剝片である。一部に、原石面を残す。**37**は、砥石である。きめ細かい粘板岩で、仕上げ砥と考えられる。両端を欠くため、長さは不明。幅は2.8センチ、厚さ0.65~1.0センチをはかる。**38**は、花崗岩の叩き石である。両端に、敲打による剝落が認められる。

このほか、111号遺構からは、11枚の銅錢が出土している。内訳は、35ページ第2表に示す。

以上の遺物から、111号遺構の年代は、16世紀前半と考えられる。

133号遺構出土遺物 (Fig.11)

133号遺構は、調査区中央からやや南よりで検出した上坑である。第1面の遺構に切られるが、おおむね長軸97センチ、短軸75センチの卵形を呈する。検出面からの深さは、24センチをはかる。

1は、土師器の壺である。口径10.6センチ、器高2.2センチをはかる。底部は回転糸切りで、遺存する範囲では板目圧痕や内底ナデ調整はみられない。

2・3は、青磁の碗である。見込みには、印花文を押す。灰色の胎に、深緑色の半透明釉を厚く施す。全面に施釉した後、高台内を輪状に剥いで露胎とする。**3**の釉剥ぎは同心円状を呈し、釉剥ぎの間の部分には、ハマの痕と思われる付着物が壺状に認められる。

4は、土師器の土鍋である。内面は横方向の刷毛目調整、外面には厚く煤が付着している。**5・6**は、瓦質土器である。**5**は、甕であろう。口縁外側は縱方向の刷毛目、内面は横刷毛調整の上から指

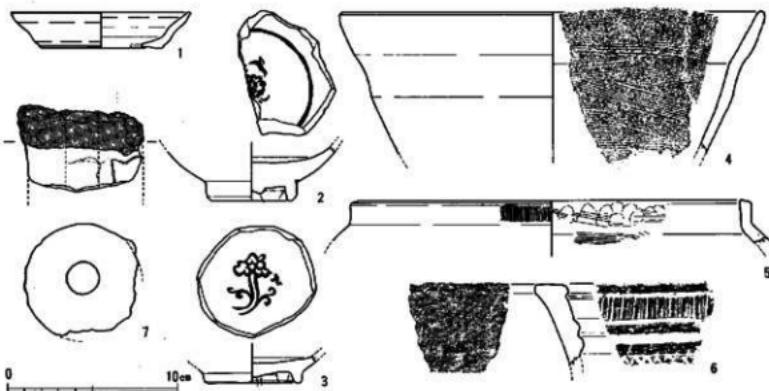


Fig. 11 133号造構出土遺物実測図(1/3)

押さえ、体部内面は横刷毛調整する。Bは、火舎であろうか。口縁外面の平行する突帯の間に、型押して縦線文を配する。3条目の突帯の下にもスタンプ文が見えるが、造存部分が少ないため、意匠は不明である。内面には、横位の刷毛目調整を行う。

7は、羽口である。筒型の土師質土製品であるが、強く火熱を受け、赤褐色～灰色に焼き締まっている。端部から3センチほどの間は、鉄滓がべったりと付着している。付着物は、黒～赤黒色を呈するが、破断面は鉄鏽をふいており、鉄滓と判断した。

このほか、明代の染付、琵琶玉（砂岩）、平瓦（コピキ）、鉄釘、鉄滓が出土している。

16世紀前半の造構であろう。

(3) 第3面

トレーナー内で検出した礎石のレベルに合わせて設定した造構検出面である。標高2.1メートル前後に当たる。

第3面では、土坑・柱穴が検出された。187号造構・188号造構・203号造構・204号造構は15世紀代の、197号造構・198号造構・207号造構は14世紀代の廃棄土坑である。208号造構からは、イルカの骨？と見られる骨が出土した(Ph. 8)。少なくとも、3枚分はあると思われる。時期を決定する資料を欠くが、207号造構から始まる切り合って検出した土坑の最後のものであることから、15世紀頃に属すると推測される。柱穴では、200号造構が、15世紀代と考えられる。また、210号造構からは、石硯の未製品が出土した(P.32, Fig18-22)。加工中に折損したために放棄し、柱の根固めに転用したものであろう。

第3面の南辺付近では、鉄分が沈着して硬化的面が検出された。その範囲を、造構全体図中に網で示す。性格は不明といわざるをえないが、土間的な面を考えたい。この面は、206号造構の西側で、盛り上がりっている。また、15世紀代の204号造構などに切られており、15世紀代の硬化面と見て大過ないだろう。

このほか、柱穴や礎石から建物のプランが推定できるが、不確実なものであり、造構全体図中に実線で推定復元案を示すにとどめる。



Ph.7 第3面全景(南東より)



Ph.8 208号遺構(南東より)

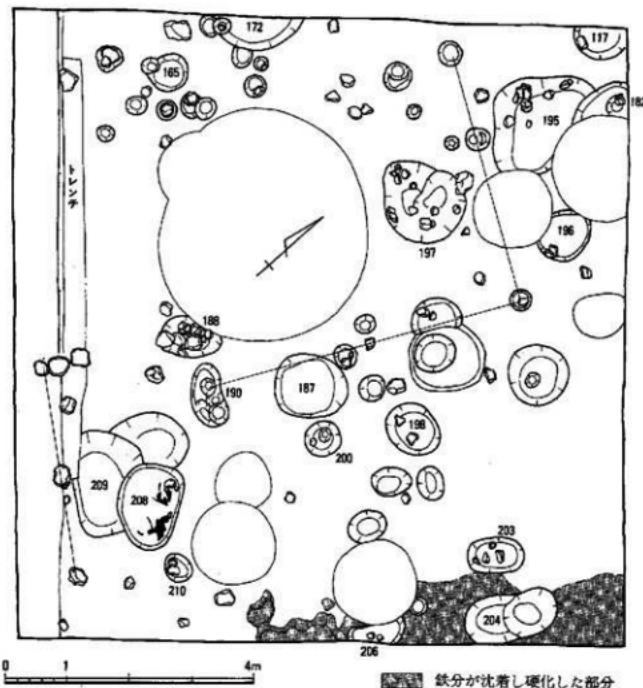


Fig. 12 第3面遺構全体図(1/80)

第3面の年代観としては、この面で検出した遺構に14世紀代のものがある一方で、第3面自体が単一の整地層で設定したものではないことから、面としての同時性に疑問が残る。したがって、おおまかに14世紀から15世紀にまたがる面として位置づけて起きたい。

次に、代表的な遺構出土遺物を示す。

204号遺構出土遺物 (Fig.13, Ph. 9)

204号遺構は、調査区南辺付近で検出した土坑である。長軸152センチ、短軸72センチの長楕円形を呈する。底面は二段掘り状となるが、調査時の所見では切り合い関係等遺構の重複は確認できなかつた。検出面からの深さは、西半で約53センチ、東半で約72センチをはかる。

1～8は、土師器である。1～4は皿で、口径に対して器高が高く厚手の1と、2以下のグループに分かれる。1は、若干歪みがあり、口径6.9～7.1センチ、器高1.5～1.7センチをはかる。全体に器壁の剥落が目だつ。2～4は、口径7.2～8.2センチ、器高1.0～1.3センチとばらつきがみられる。5～7は、壺である。形態的、法量的に2分できる。5・6は、口径10.6～11.0センチ、器高1.9～2.3センチで、内湾しながら大きく開く体部を持つ。5には口縁部に縁が付着しており、灯明皿として用いられたことを示している。7は、口径12.4センチ、器高2.85センチをはかり、法量的には一回り大

きく、体部はゆるく内渦しつつも急角度で立ち上がる。口縁には煤が付着している。これらの重・环は、底部を回転糸切りし、1・2・6には内底部のナテ調整と、外底部の板目圧痕がみられる。8は、小碗であろう。口径8.8センチ、底径4.1~4.4センチ、器高3.8~3.9センチをはかる。底部は、回転糸切りで、体部および内面は横ナテ調整される。胎土は、肌色~淡褐色で、きめ細かく精良である。焼成も良好で、焼き締まった感がある。在地の土師器とはみなし難く、搬入品であろう。

9は、青磁の碗である。口縁の直下に、雷文帯を巡らす。灰白色の胎土に、灰緑色の半透明釉を厚めに施す。10・11は、天目茶碗である。10は、明るい灰色の胎土に、黒色の釉をかける。11は、灰色で黒い微砂を含む胎土に、黒褐色の釉を施す。体部下位から高台は、露胎となる。

12は、朝鮮王朝の灰釉磁の碗である。肌色~明灰色を呈し、きめが粗く軟質の胎土に、灰色がかかった淡黄白色の不透明釉をかける。釉には、細かい貫入がみられる。

13~16は、瓦質土器である。13は鉢で、摺り目は見られない。外面は横ナテ、内面は横刷毛調整する。14は、羽釜の小片である。15は、摺り鉢の底部である。内面には、横ナテ調整を行った後に5条を単位とする摺り目が付けられている。16は、おそらく甕の底部であろう。内面はナテ調整するが、体部内面には、板状の工具をもちいて横方向にナテ調整している。

このほか、輸入陶器片、炉壁破片、鐵滓などが出土した。

15世纪代の造構と考えている。



8

Ph.9 204号造構出土土師器碗

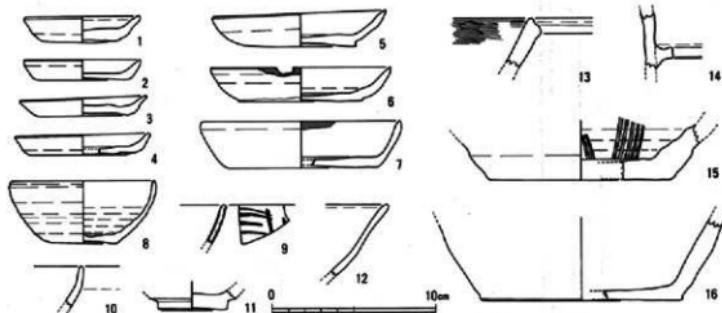


Fig. 13 204号造構出土遺物実測図(1/3)

(4) 第4面

壤土質土層を除去した粗砂層、あるいは砂質土層の上面に設定した、造構検出面である。標高1.7メートル前後に当たる。トレンチの土層断面で観察したところでは、第4面の粗砂層よりも下では、造構の掘り込みが確認できなかった。したがって、第4面は、本調査地点では最も早い生活面と考えられる。

第4面では、土坑・柱穴・溝が検出された。265号造構は、長方形のプランを持つ大型の土坑であるが、遺物の出土状況に意図的なものがみられず、埋土中に獸骨が含まれており、廃棄土坑とするのが妥当だろう。14世紀後半から15世紀初めにかかる時期と思われる。308号造構・334号造構などは、14世紀代の廃棄土坑である。281号造構は14世紀代の溝である。このほかの造構については、必ずしも時期は明らかではない。

このほか、柱穴や礎石から建物のプランが推定できるが、不確実なものであり、造構全体図中に実線で推定復元案を示すにとどめる。

第4面の年代觀は、14世紀代に当てられよう。

次に、代表的な造構出土遺物を示す。

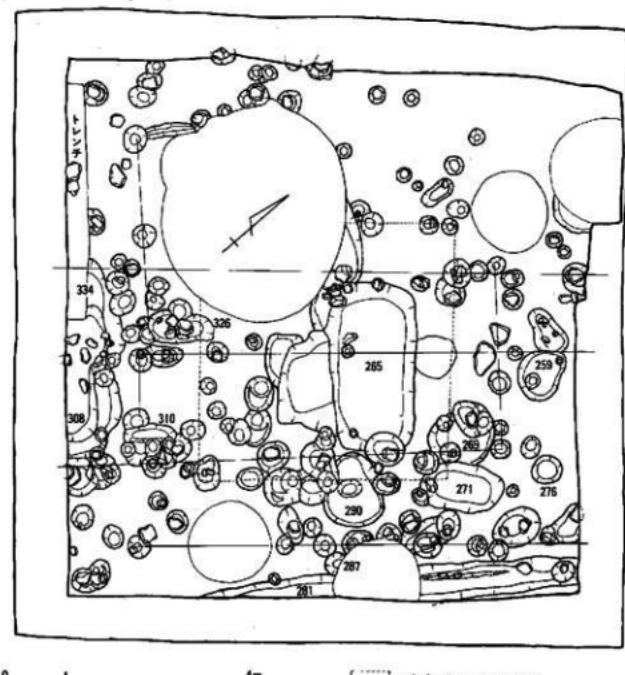
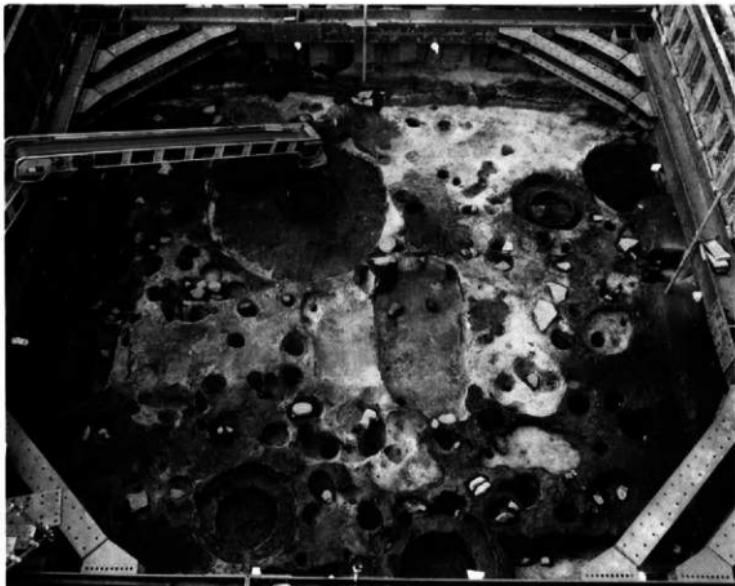


Fig. 14 第4面造構全体図(1/80)



Ph.10 第4面全景(南東より)

265号造構出土遺物 (Fig.15, Ph.11)

265号造構は、調査区中央付近で検出した土坑である。長辺265センチ、短辺140センチの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは、37センチをはかる。平面的な形態から、土葬墓もしくは、地下室状土坑の可能性も考えられた。しかし、遺物の出土状況に意図的な要素が感じられず、また調査時の所見では、埋土中に魚骨などが混じることなどから、両者の可能性は否定された。したがって、廃棄土坑とするのが妥当であろう。

1~31は、土師器である。1~19は皿で、口径が小さく器高が高い1~4と、口径が大きく器高が低い5~19とに大きく分かれる。1~4は、口径7.1~7.6センチ、器高1.8~2.0センチをはかる。器肉の厚さは比較的一定で、体部はわずかに内湾気味に上方に向かって開く。5~19は、口径7.5~8.4センチ、器高1.0~1.5センチである。20~31は、壺である。20~30は、口径11.5~12.7センチ、器高2.5~3.4センチをはか



Ph.11 265号造構(南東より)

る。24・25の口縁および29の口縁と見込みには、油煙が付着しており、灯明皿として用いられたことを示している。22の体部には、2カ所に指が当たった痕跡がみられる。31は、他に比べて格段に大きい壺である。口径17.4センチ、器高3.7センチをはかる。形態的・手法的には、他の土師器と何等変わることではなく、在地産土師器のセットの一角を占めていたことがわかる。と言っても、この手の大型の壺は点数的には少なく、特殊な用途または他の壺とは異なる用途を考える必要があろう。これら土師器の皿・壺は、すべて底部は回転糸切りで、5・10・15・18・20には、内底部のナテ調整と外底部の板目圧痕が認められる。

32・34は、瓦質土器の鉢である。32は、内面を刷毛目調整、外面は指押さえの上に粗く刷毛目を当てる。33は、内面に刷毛目調整、外面に指押さえとナテ調整を加える。内面の下部は、使用のため細かく球状に剥落している。34は、内面にナテ調整、外面に刷毛目調整を行う。口縁の内角は、斜めに両取りされて段をなす。35・36は、土師器の土鍋である。内面は、横方向の刷毛目調整、外面には厚く煤の付着がみられる。

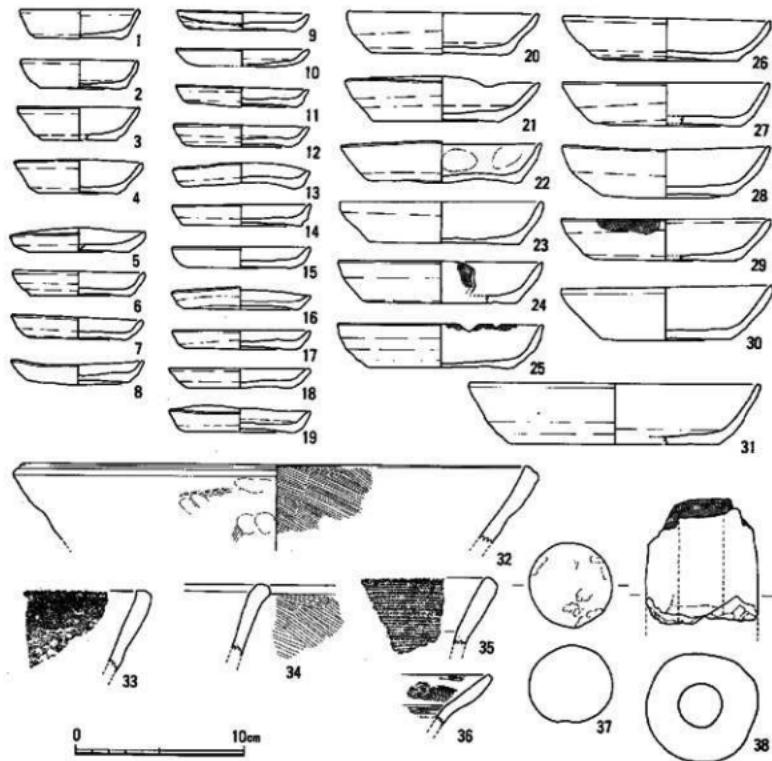


Fig. 15 265号造構出土遺物実測図(1/3)



Ph.12 265号造構出土遺物(縮尺不統一)

37は、砂岩の種珠玉である。敲打によって、滑らかな球面に整えている。38は、ふいごの羽口である。土師質の円筒形土製品であるが、強い火熱を受けて焼き締まっている。胎土は粗く、板殻を含む。

先端には、鉄滓と思われる黒色の付着物が、べったりと付いている。

このほか、内面が火熱を受けて焼けた土師質の容器片が出土しているが、実測に堪えず、また器形は判断できなかった。

14世紀後半の造構とみたいが、15世紀にかかる可能性もある。



Ph.13 281号造構(南西より)

281号造構出土遺物 (Fig.16, Ph.14)

281号造構は、調査区南辺にそって検出した溝である。素掘りで、断面は、角の取れた逆台形を呈する。検出しえた延長608センチ、幅約55センチ、深さは西端で14センチ(標高1.74メートル)、東端で29センチ(標高1.56メートル)と西から東に傾斜している。

1・2は、土師器の皿である。口径8.8-9.0センチ、器高1.6-1.7センチをはかる。底部は回転糸切りで、内底ナデ調整と外底部の板目圧痕はみられない。

3・4は、朝鮮王朝の象嵌青磁である。3は、碗



Ph.14 281号造構出土象嵌青磁

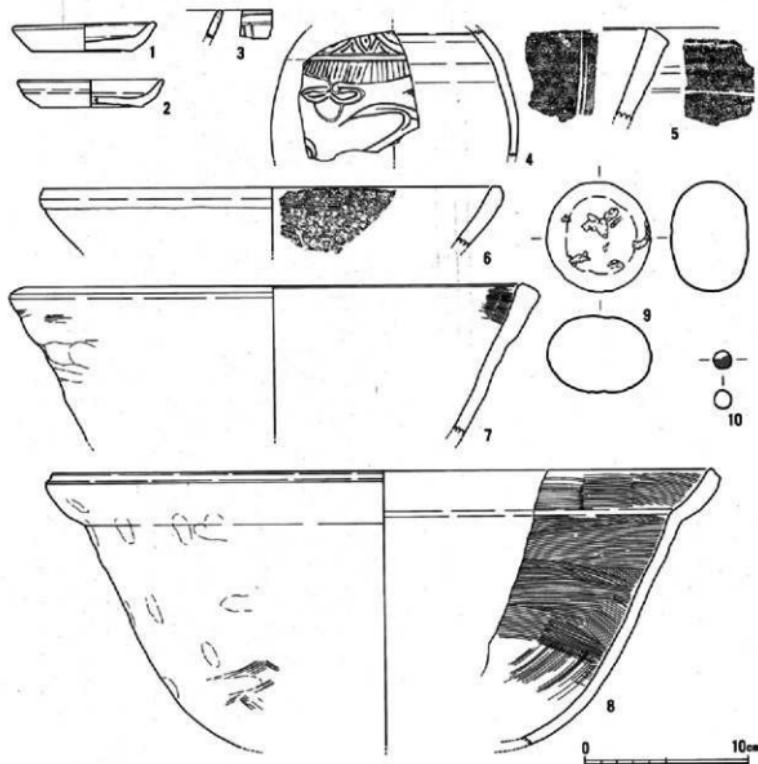


Fig. 16 281号造構出土遺物実測図(1/3)

もしくは小鉢である。黄灰色できめ細かい胎土に、緑灰色の半透明釉をかける。横線とそれから垂下する縦線が、白土で象嵌されている。4は、梅瓶の肩付近の破片である。胎土は、灰茶色できめが細かい。白土と黒土で花弁文・草花文を象嵌し、灰色の半透明釉を施している。

5は、備前陶器の折り鉢である。砂粒を多く含んだ粗い胎土だが、よく焼き結まり、うすく紫味を帯びた焦げ茶色を呈している。口縁上面の端部は、内外にわずかに張り出しながら若干外傾する。

6・7は、瓦質土器の鉢である。内面は横方向の刷毛目調整であるが、使用のため磨滅している。

8は、土師器の土鍋である。内面は刷毛目調整、外側は指押さえで、部分的に刷毛目を加える。外側には、煤が付着している。

9は、叩き石である。花崗岩製。表面は滑らかに整えられているが、若干平たい両面の中央は、使用のため穿ったようにくぼんでいる。10は、土玉である。指先で丸めたらしく、きれいな球形をしている。土師質に焼成され、茶褐色を呈するが、半分ばかりに黒斑がある。

このほか、炉壁片、鐵滓、鐵釘、銅錢2枚（元豊通寶1枚、解説不能1枚）などが出土している。これらの出土遺物からみて、281号造構は、14世紀後半に位置づけるのが妥当であろう。

(5) 中央グリッドの調査

第4面以下の堆積状況とその時期を確認するため、調査区中央に4メートル四方のグリッドを設定し、掘り下げを行った。

掘り下げは、湧水のために砂層の質が確認できなくなるまで行なう予定であった。しかし、実際に湧水が始まった時点で、グリッド周囲の壁が崩落する恐れがあり、掘り下げを断念せざるを得なかつた。そこからさらに、十文字のトレーニングを設定したが、予想通り湧水による砂の崩れは激しく、結果標高0.4メートル付近までの確認にとどまった。

中央グリッドでは、木杭が3本、北東から南西に一直線に並んで出土した。方位は、N=50°-Eである。杭の間隔は、東側の杭から220センチ、80センチをはかる。両側の杭は丸杭で、東の杭が直径約5

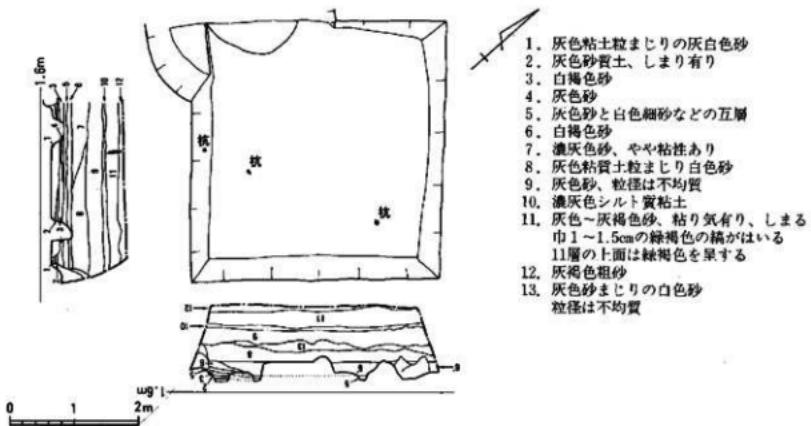


Fig. 17 中央グリッド実測図(1/80)



Ph.15 中央グリッド全景(南東より)



Ph.16 中央グリッド土層 (1)南西壁、(2)南東壁

センチ、西の杭が約3センチ、中央の杭は5×2センチの角杭であった。グリッド南西壁にかかった西の杭の観察によれば、杭の頭は標高0.95メートルあたり、ちょうど第10層と11層の境付近にあった。杭の先端は、標高0.7メートル付近、第12層の中にあたる。杭の全長がこれだけであったとは考えがたい。また、杭の上方を見るとちょうど第7層と8層の境目がこのあたりにある。この層の変化が杭によるものであるとすれば、杭は第8層よりも上から、第9層以下に打ち込まれたもので、第7層あたりで杭と杭の間に横木が渡されていた可能性がある。といつても、第7層と8層の間に有機質の土層がたまっている状況はないから、しがらみの様に流れをせき止める構造が設けられた訳ではなく、築の様に流れを軽く妨げる程度の施設が推定できよう。ちなみに、杭列の方向は、後述する博多浜の砂丘汀線には直交している。

なお、堆積土層に関する所見については、前節すでに述べたので、ここでは出土遺物についてその概要を述べる。ただし、小片ばかりのため実測に堪えず、図示はしていない。

第7層・8層

土師器（底部回転糸切り）、青磁（竈泉窯系、割花文碗）、白磁、輸入陶器、須恵器など

第9層

土師器、瓦器、青磁（竈泉窯系、同安窯系）、白磁、天目、綠釉陶器（中国）、瓦など

第10層

土師器（底部ヘラ切り・回転糸切り）、楠葉型瓦器（外面にヘラ磨きなし）、青磁（竈泉窯系）、白磁、青白磁、輸入陶器、滑石製石鍋

以上の各層の遺物を見ると、土師器・輸入陶器からは12世紀後半から13世紀初めの様相を示している。しかし、楠葉型瓦器を見ると内面にはヘラ磨きを持つものの、外面のヘラ磨きはすでに消滅している。この点からみれば、12世紀代を当てるのには無理があり、第10層の形成時期は13世紀初頭と見るのが妥当であろう。したがって、第9層から7層は、それ以後、おそらく13世紀前半代に堆積したものであろう。その後、堆積環境に変化があり、漏水状態の元で、あるいは埋立整地を伴いながら、13世紀後半から14世紀にかけて、第6層から1層が形成されたものと考えられる。

(6) その他の出土遺物 (Fig.18, Ph.17, 18)

本章の最後に、これまでの記述から漏れた遺物の中から、注目されるもの、比較的遺存状態の良かったものを選んで、図示する。

1・2は、土師器である。1は、壺である。口径に対して底径が小さく、やや内湾気味に大きく聞く部体を持つ。胎土は、径0.5~1.0ミリほどの石英粒を含み、きめがやや粗いものの、全体としてはよく整っている。焼成も良好で、焼き縮まり気味となり、明淡褐色を呈する。底部は回転糸切りで、内底部にはナデ調整を加える。体部は、内外面とも横ナデを強く施す。搬入土師器の可能性がある。第2面からの掘り下げ途中に出土した。2は、香炉であろう。破片のため、脚は一本しか残っていないが、本来は鼎脚であったと思われる。胎土は、石英粒混じりで粗く、焼成はやや軟質で、赤茶色を呈する。内外面とも粗い刷毛目調整で、整形も難である。脚は、指押さえで貼り付ける。第1面からの掘り下げ中に出土。

3・4は、青磁である。3は、皿であろうか。体部と見込みとの間を、大きくくぼませる。見込みの中央を、円形に釉剥ぎして露胎とする。この露胎部分の中程には、ヘラ記号を刻み、周囲には、重ね焼きの付着物が弧状に残る（巻頭図版2-1）。胎土は、灰白色で小空隙が多く、軟質である。釉は、灰緑色の半透明で、ガラス光沢は強く、細かい水裂が認められる。高台の疊付きから外底部は、

露胎となる。第1面からの掘り下げ中に出土。4は、基筒底の鉢である。文様は見られない。灰白色の、緻密だがややきめの粗い胎土に、灰緑色の半透明釉を施す。釉は、濁った感があるが、ガラス光沢はある。全面に施釉するが、外底部の中央は丸く露胎とする。第2面からの掘り下げ中に出土。

5は、青白磁の皿である。白色で緻密な胎土に、うすく青みを帯びた透明釉を施す。釉は、ガラス光沢が強く、細かい氷裂がみられる。高台疊付きの外邊から外底部は露胎となる。ほぼ完形で口縁の一部を欠くのみだが、その欠けた部分と高台の露胎部分は、うすく煤けている。第1面からの掘り下げ中に出土した。

6～8は、白磁の皿である。6は、白色で緻密だが、小空隙が多くみられる胎土に、透明釉をかける。体部下位から外底部は露胎である。高台は、アーチ状に削り込む。見込みには、重ね焼きの目痕が認められる。なお、高台内に墨書が残るが、一部分のため判読できない。第2面からの掘り下げ中に出土。7も、高台を削ってアーチ状につくる。高台の接地部分は、5カ所であり、釉が付着している。見込みには、やはり5カ所の目痕が残る。乳白色できめが粗く軟質の胎土に、白濁した不透明釉をかける。釉には光沢がなく、釉表が荒れており、被熱したものと知れる。口縁の一部を小さく欠き、灯心を置いたようで、この部分には油煙が付いている。第1面からの掘り下げ中に出土。8は、大きく外反して開く体部の裾がそのまま高台となり、底部はこれに基筒底状に取り付く。全面に施釉した後、疊付きを削って、露胎とする。白色で緻密な胎土に、白濁して透明な釉を施す。第1面からの掘り下げ中に出土。

9・10は、明代の染付の皿である。白色で緻密な胎土に、うすく青味を帯びた透明釉をかけ、濃い藍色で染め付けする。意匠は、卷頭図版2-3・4およびPh.17に示す。全面施釉した後、疊付きの釉を搔きとつて露胎とする。なお、9の疊付きには、砂粒が付着している。9は第1面からの、10は第2面からの掘り下げ中に出土している。

11～18は、朝鮮王朝の陶磁器である(Ph.17,18)。11は、白釉陶器の皿である。平底の底部と見込みに、それぞれ5カ所の胎土目痕がつく。淡褐色で粗い陶質の胎土に、白濁した半透明釉をうすくかける。釉は、うすいテリ状の光沢を示す。第2面119号遺構出土。12は、白磁の小碗である。白色で緻密な胎土に、やや青味を帯びた透明釉を施す。ガラス光沢は強い。高台の疊付きから外底部は、露胎となる。第2面からの掘り下げ中に出土。13・14は、象嵌青磁である。13は、碗である。灰色で、比較的きめ細かい胎土に、灰緑色の半透明釉を施す。口縁部の外面は、帯状に緑褐色を呈する。内面には、白土を三島手に象嵌する。全面施釉であるが、高台の疊付きには砂目が付着している。第3面からの掘り下げ中に出土。14は、小鉢である。灰白色で緻密、精良な胎土に、灰色の透明釉をかける。見込みと体部外面には、白土と黒土で象嵌が施される。疊付きから底部は、露胎となる。第2面からの掘り下げ中に出土。15は、灰緑釉陶器の皿である。胎土は、灰色を呈し、きめが粗く、白色の微砂粒を含む。釉は、灰緑色、不透明で、うすくテリ状にかかり、光沢は鈍い。全面に施釉し、見込みと疊付きには、それぞれ5カ所の砂目が付く。第2面からの掘り下げ中に出土。16・17は、青磁である。16は、皿である。灰色で、きめは細かいが小空隙が見られる胎土に、灰鼠色の釉がうすくかかる。釉には、透明感はなく、テリ状の光沢が付く。第2面からの掘り下げ中に出土。17は、小碗である。灰白色できめが粗い胎土に、灰緑色の不透明釉が施される。釉には、貫入・水表が多く、火熱を受けたらしく釉表はあれている。見込みには、3カ所の目痕が、高台内には、泡だった釉状の付着物が認められる。第2面からの掘り下げ中に出土。18は、粉粧沙器の小鉢である。暗灰色で、きめはやや粗いが緻密な胎土に、灰濁した半透明釉を全面にうすく施す。口縁の外面に、白土を刷毛塗りする。第2面からの掘り下げ中に出土。

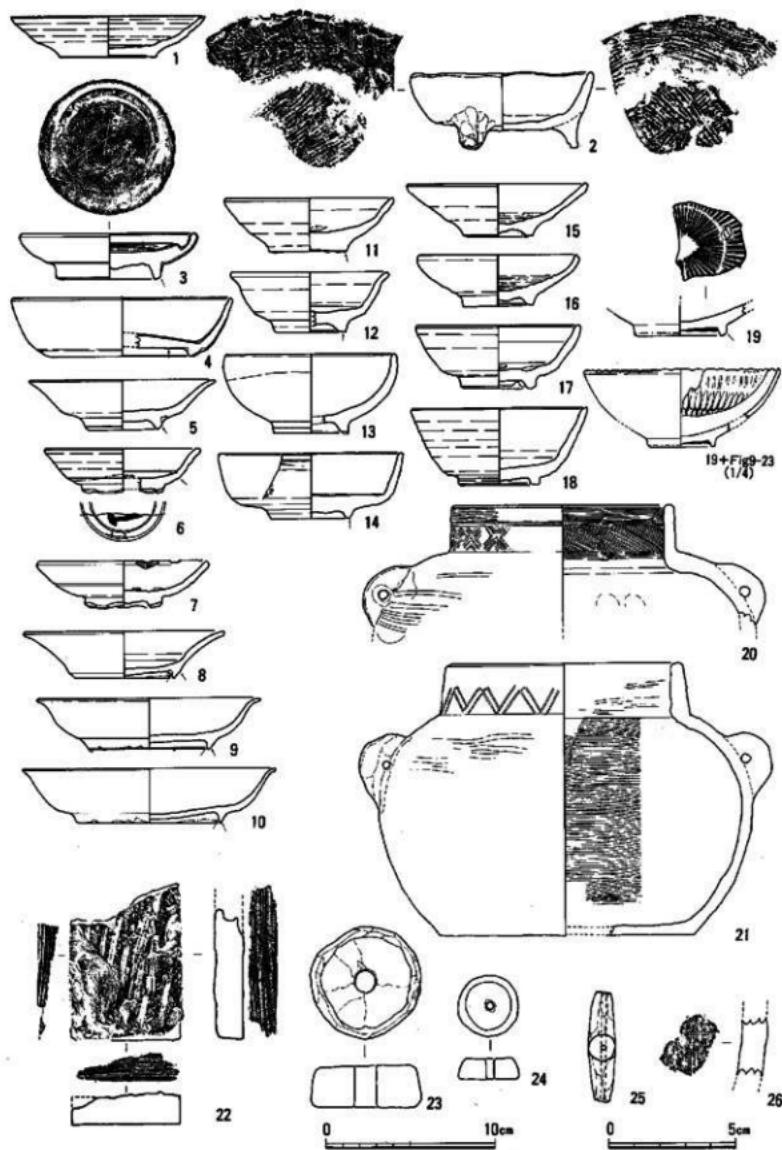
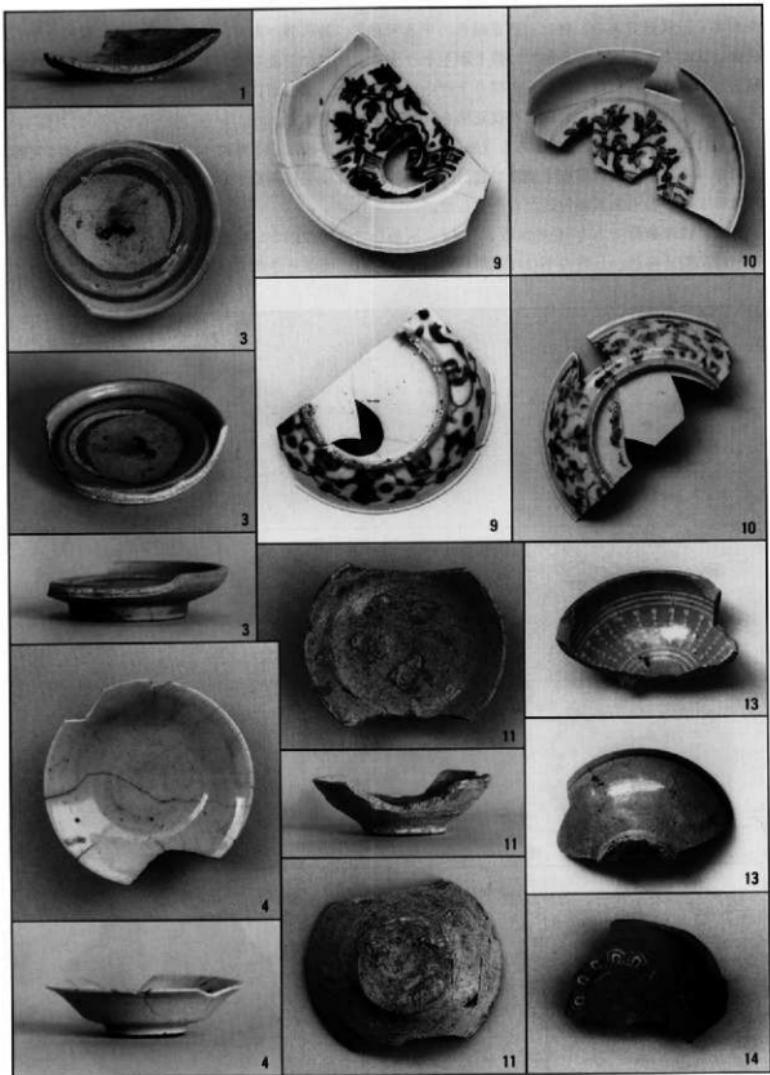


Fig. 18 その他の出土遺物実測図(1/3、25・26-1/2)

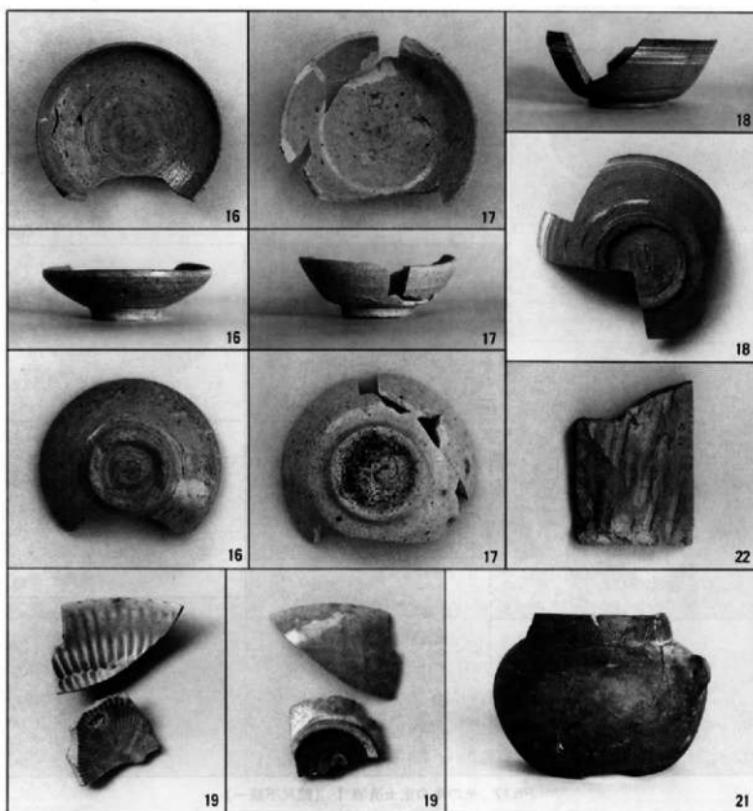


Ph.17 その他の出土遺物 1 (縮尺不統一)

19は、ベトナム青磁の碗である(巻頭図版1-2)。胎土は、うす茶色を呈し、きめは整うが気孔がやや多く、軟質である。釉は、灰黄緑色の半透明釉で、透明感があり、水堀がはいる。縁付きから外底部は露胎であるが、外底部には鉄を刷毛塗りする。成形は塑造りで、菊弁状につくる。見込みには、胎土目がみられる。第3面からの掘り下げ中に出土した。第2面111号造構出土の体部片(Fig. 9-23)と、同一個体とみられ、合成した復元図を、19の下に図示する。

20・21は、瓦質土器の湯釜である(巻頭図版1-1)。外面は、丁寧にヘラ磨きされる。ほぼ完形品の21でみると、内面は横刷毛調整で底部内面は放射状に刷毛目調整する。20は第2面77号造構出土、21は第1面下の道路断面付近から出土した。

22は、硯朱製品である(巻頭図版2-2)。灰褐色できめの細かい粘板岩を用いている。裏面はすでに平滑に整えられ、三方の小口には粗い擦痕がみられ、面取りされている。上面には、縦方向のノミ



Ph.18 その他の出土遺物2 (縮尺不統一)

痕が平行して残り、鏡面の加工途中であったことがわかる。加工中折損したために、廃棄したものであろう。第3面210号造構出土。23は、石鑄であろう。滑石製である。削りで、円環状に成形する。第1面からの振り下げ中に出土。24は、土製紡錘車であろう。胎土は、小砂粒混じりで粗い。本来は、土師質に焼成されたものであろうが、被熱のためカリカリに焼けて泡立ち、赤褐色～黄褐色を呈する。

第1表 出土銅鏡一覧

(総数 103枚)

| 銅貨名 | 王朝名 | 初鑄年 | 西暦 | 枚数 | 銅貨名 | 王朝名 | 初鑄年 | 西暦 | 枚数 | 銅貨名 | 王朝名 | 初鑄年 | 西暦 | 枚数 |
|------|-----|--------|------|----|------|-----|--------|------|----|------|------|-------|------|----|
| 開元通寶 | 唐 | 武徳4年 | 621 | 3 | 嘉祐通寶 | 北宋 | 嘉祐元年 | 1056 | 1 | 政和通寶 | 北宋 | 政和元年 | 1111 | 1 |
| 太平通寶 | 北宋 | 太平興國元年 | 976 | 1 | 治平元宝 | 北宋 | 治平元年 | 1064 | 1 | 宣和通寶 | 北宋 | 宣和元年 | 1119 | 1 |
| 景德元寶 | 北宋 | 景德元年 | 1004 | 1 | 熙寧元寶 | 北宋 | 熙寧元年 | 1068 | 6 | 皇宋元寶 | 南宋 | 寶祐元年 | 1253 | 1 |
| 祥符元寶 | 北宋 | 大中祥符元年 | 1008 | 2 | 元豐通寶 | 北宋 | 元豐元年 | 1078 | 7 | 洪武通寶 | 明 | 洪武元年 | 1368 | 1 |
| 天聖通寶 | 北宋 | 天聖元年 | 1023 | 1 | 元祐通寶 | 北宋 | 元祐元年 | 1086 | 3 | 永樂通寶 | 明 | 永樂元年 | 1403 | 2 |
| 皇宋通寶 | 北宋 | 寶元2年 | 1038 | 4 | 紹聖元寶 | 北宋 | 紹聖元年 | 1094 | 3 | 寛永通寶 | 江戸 | 寛永13年 | 1636 | 2 |
| 至和元寶 | 北宋 | 至和元年 | 1054 | 1 | 聖宋元寶 | 北宋 | 建中靖國元年 | 1101 | 1 | 一錢 | 解説不能 | | | 1 |
| 嘉祐元寶 | 北宋 | 嘉祐元年 | 1056 | 1 | 大觀通寶 | 北宋 | 大觀元年 | 1107 | 2 | 解説不能 | | | | 56 |

第2表 造構別出土銅鏡一覧

| 面 | 番号 | 銅貨名 | 点数 | 備考 | 面 | 番号 | 銅貨名 | 点数 | 備考 | 面 | 番号 | 銅貨名 | 点数 | 備考 |
|----|-----|------|----|------|------|-----|------|----|------|------|----|------|----|-----|
| 1面 | 001 | 寛永通寶 | 1 | | 2面 | 153 | 解説不能 | 1 | | 2面 | 丶 | 至和元寶 | 1 | |
| | | 解説不能 | 1 | | 3面 | 169 | 開元通寶 | 1 | | 2面 | 丶 | 永樂通寶 | 1 | |
| 1面 | 016 | 政和通寶 | 1 | | 3面 | 172 | 元祐通寶 | 1 | | 2面 | 丶 | 解説不能 | 2 | |
| 1面 | 023 | 紹聖元寶 | 1 | | 3面 | 181 | 解説不能 | 3 | | 3面 | 丶 | 皇宋通寶 | 1 | |
| 1面 | 024 | 一錢 | 1 | 年号不明 | 3面 | 187 | 皇宋通寶 | 1 | 未 | 3面 | 丶 | 解説不能 | 3 | |
| | | 解説不能 | 2 | | 元豐通寶 | 2 | 未 | | | 4面 | 丶 | 元豊通寶 | 1 | |
| 1面 | 025 | 解説不能 | 1 | | 元祐通寶 | 1 | 未 | | | 4面 | 丶 | 解説不能 | 2 | |
| 1面 | 037 | 永樂通寶 | 1 | | 紹聖元寶 | 1 | | | | 1面下 | 丶 | 太平通寶 | 1 | |
| 1面 | 046 | 寛永通寶 | 1 | | 宣和通寶 | 1 | 未 | | | 1面下 | 丶 | 皇宋通寶 | 1 | |
| 2面 | 074 | 解説不能 | 2 | | 解説不能 | 1 | | | | 1面下 | 丶 | 嘉祐通寶 | 1 | |
| 2面 | 104 | 天聖元寶 | 1 | | 3面 | 190 | 大觀通寶 | 1 | | 1面下 | 丶 | 熙寧元寶 | 2 | |
| 2面 | 111 | 嘉祐元寶 | 1 | 未 | 3面 | 195 | 熙寧元寶 | 1 | | 1面下 | 丶 | 解説不能 | 8 | |
| | | 治平元寶 | 1 | 未 | 3面 | 196 | 解説不能 | 1 | 嘉祐通寶 | 2面下 | 丶 | 熙寧元寶 | 1 | |
| | | 熙寧元寶 | 1 | | 3面 | 198 | 元祐通寶 | 1 | | 2面下 | 丶 | 大觀通寶 | 1 | |
| | | 元祐通寶 | 1 | 未 | 4面 | 281 | 元豊通寶 | 2 | | 2面下 | 丶 | 解説不能 | 9 | |
| | | 聖宋元寶 | 1 | 未 | | | 解説不能 | 1 | | 3面下 | 丶 | 祥符元寶 | 2 | |
| | | 皇宋元寶 | 1 | 未 | 4面 | 297 | 皇宋通寶 | 1 | | 3面下 | 丶 | 元豊通寶 | 1 | |
| | | 解説不能 | 5 | 未×2 | 4面 | 303 | 紹聖元寶 | 1 | | 丶 | 丶 | 解説不能 | 2 | |
| 2面 | 116 | 景德元寶 | 1 | | 4面 | 308 | 熙寧元寶 | 1 | | 表裏 | 丶 | 解説不能 | 1 | |
| | | 洪武通寶 | 1 | | | | 解説不能 | 2 | | トレンチ | 丶 | 解説不能 | 1 | |
| | | 解説不能 | 3 | | 4面 | 334 | 開元通寶 | 1 | | 北壁 | 丶 | 開元通寶 | 1 | |
| 2面 | 123 | 解説不能 | 1 | | | | 解説不能 | 4 | | | | 総計 | | 103 |

※は帯の状態で出土

第1面からの掘り下げ中に出土。25は、土鑑である。土師質の焼成で、赤茶色を呈する。指押さえで、管状に成形する。第2面からの掘り下げ中に出土した。

26は、焼き塙壺の破片である。小砂粒混じりの胎土で、土師質に焼成されて、赤茶色を呈する。外側は、指または掌で整形、内面には布目圧痕が残っている。第3面201号造構から出土したが、遺物としては8世紀から9世紀にかかる時期に属する。

第1表・第2表に、本調査から出土した銅錢を集成した。本調査地点検出造構の時期が、14世紀から16世紀に限られるのにも関わらず、宋錢が圧倒的に多く、当該期の明錢が少ないことに注意したい。

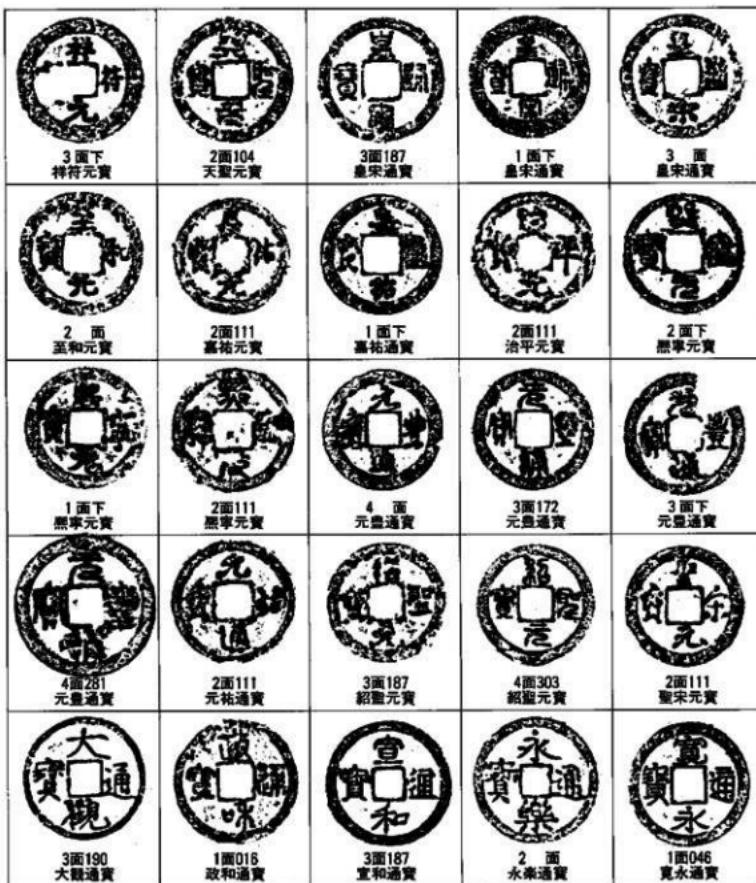


Fig. 19 出土銅錢拓影 (1/1)

第三章 ま と め

以上、簡略ながら博多遺跡群第87次調査の概略を述べた。最後に、本調査の要点をまとめ、今後の調査・研究の資としたい。

1. 本調査地点は、博多遺跡群が基盤とする砂丘面上には、立地していない。
2. 本調査地点における遺構の出現は、14世紀代にある。
3. 16世紀頃には、調査区の北西辺付近に、道路が通されていた。

博多遺跡群は、博多湾に沿って形成された砂丘上に位置している。この砂丘は、大きくは三列あることが知られている。歴史的には、博多湾側の砂丘を「ゆき息浜」・「沖浜」などと呼ぶ。内陸側の二列には、特に呼称はないようだが、便宜的に「博多浜」と呼ばれている。

本調査地点の検討にはいる前に、第一章第3節で述べたところと重複する部分が多いが、これまでの博多遺跡群の発掘調査と、文献史学の研究成果から、博多遺跡群の略史を述べておく。遺構の初源を追うと、まず弥生時代中期に、最も内陸側の砂丘の頂部付近から生活が始まる。そして、古墳時代前期には、内陸側砂丘全域に集落が拡大、中央の砂丘にも方形周溝墓が営まれていることが明らかになった。奈良時代には、遺構は博多浜の全面でみられるようになる。平安時代後期から、博多には多数の宋人が居住し、中国との貿易に従事した。博多は、彼ら宋人の元で都市として繁栄することになる。そして、11世紀後半頃、博多浜と息浜の間が一部陸橋状に埋め立てられ、息浜にも生活の営みが及ぶようになる。息浜が本格的に都市化するのは、13世紀以降のようだが、室町時代には博多浜を渡り、朝鮮貿易・明貿易で繁栄を誇る。しかし、戦国時代の戦禍で博多は荒廃、豊臣秀吉による復興を経て、博多浜と息浜のふたつの町場が結合し、近世都市博多に生まれ変わるのである。

(1) 調査地点の立地について

以下では、以上の博多の変遷をふまえた上で、本調査地点の局所的な立地条件について考えたい。本調査地点の立地を考える上では、周辺において行われたこれまでの調査成果が参考になる。まず、それらについて、簡単に述べる (Fig.20)。

第14次調査^{①.2.3.4}

本調査地点から、東に50メートルほど離れる。1981年という、博多遺跡群では初期の調査である。ビル工事中の発見による緊急調査であり、すでに現地表下2.5メートルまでの床掘が行われていた。

基本的層序は、床掘部分を除いて、大きく3層に分かれる。上層は、標高0.7メートル付近から1.6メートル前後までで、12世紀後半以降の埋立(整地)層である。井戸が営まれていた。中層は、青磁をほとんど含まず、白磁を中心とする包含層で、うすい砂層をはさみ3枚の泥炭層からなる。遺構は営まれていない。下層は、奈良時代・平安時代初期の遺物を少量含むが、大半は11世紀後半代の遺物である。

中層からは、白磁破片の集積がみられた。時期は12世紀後半とされ、貿易船からの荷揚げの際に何らかの理由で破損したものを一括廻業したものと推定されている。

第29次調査^③

北に420メートルほど離れた調査地点である。17世紀初頭の埋め立て遺構が検出された。報告者によると、「石城志」(津田元顯校訂、津田元貴編録、明和二年=1765)に言う慶長五年(1600)の小早川

秀秋および慶長十八年（1613）の黒田長政による埋め立ての遺構にあたる可能性が高い。基盤となる砂丘面は見あたらなかった。

第40次調査^④

北東に250メートルほど離れる。4面の調査で、12世紀後半から16世紀までの遺構が検出された。やはり、砂丘面は検出できず、第4面以下に設定したトレンチの観察から、本来は河川の流路（河口近くで海との出入りがある）であり、12世紀前半頃に埋め立てが行われたことが明かとなった。

また、道路1本挟んだ南側の試掘調査では、現地表下2.5メートルほどで淡黄色砂層が検出され、砂丘がおよんできていることが確認できた。

第56次調査^⑤

南東に110メートルほど離れた調査地点である。5世紀から19世紀にわたる遺構を調査した。標高2.6~2.8メートルで、砂丘上面である黄白色砂層を検出している。

第81次調査^⑥

北東に140メートルほど離れる。4面にわたる調査で、13世紀から17世紀にいたる遺構を検出した。



Fig. 20 第87次調査地点と周辺の調査地点(1/2,000)

報告によれば、湿地帯を埋め立てた土地で、13世紀中頃から人々の生活の場となると言った。

第72次調査⁽¹⁾

北西に80メートル離れる。15世紀後半以後の造構を調査している。砂丘砂層は、検出されなかった。

第77次調査⁽²⁾

東に90メートル離れる。8世紀から16世紀におよぶ造構を調査した。標高3.0メートル前後で、砂丘上面である淡黄色砂層を検出している。

築港線関係第3次調査⁽³⁾

北東に290メートル離れた調査地点である。8世紀から17世紀までの造構を、7面にわたって調査した。最下面である第7面では、調査区のちょうど中ほどで、砂丘砂である淡黄色砂層が北西に向かって急激に落ち込んでいく様子が判明した。落ち込み部分に堆積した砂は、40次調査と同様に、河口付近の流路の堆積と想定できた。また、この部分に造構が営まれるのは、12世紀前後からである。

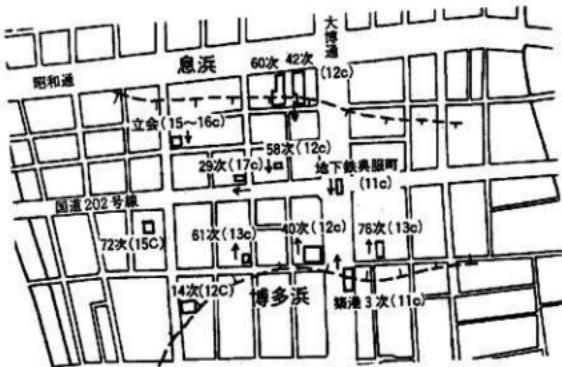


Fig. 21 砂丘間埋立の推移(←は埋立の方向、()は時期)

大庭註12文献に加筆

これらの調査地点からみると、博多浜の砂丘は、南から第56次調査地点の西側を通り、第77次調査地点と14次調査地点の間を抜け、第61次調査地点の南側あたりからやや東に向きを変え、第40次調査地点とその南側の試掘調査地点の間を通り抜けて、築港線第3次調査地点に至ったものと推定される。そのうえで本調査地点を見れば、本米の砂丘汀線からは、第14次調査地点よりもさらに海側に入ったところと言うことになる。本調査地点の造構の出現の遅れ、第14次調査地点で造構が営まれている12世紀後半以降（上層）になども、依然として厚い粗砂層が堆積している点などは、この汀線からの距離で説明できる。ただし、第14次調査地点では標高0.6メートル付近から整地層が始まっているのに対し、本調査地点では、1.5メートル前後まで粗砂層がきれいに堆積している。標高1.5メートルというのは、第14次調査地点においてはビル工事の床掘の深さには該当し、前述の上層は、この下に形成された層である。したがって、12世紀から13世紀代まで、生活面と海面ともに、上昇を続けたと考えざるを得ないことになるのではないか。この点については、自然地理の知識のない筆者の能力の及ぶところではないが、第14次調査の正式な報告を待って、厳密に比較検討しなくてはならない問題であろうと思う。

Fig.21に、博多浜と息浜の間の水道部分での調査から判明した、それぞれの埋立時期とその方向を示す。まず、図の中央あたりの地下鉄呉服町工区調査地点と、その下の築港線第3次調査地点が11世紀後半に埋め立てられて、両砂丘が陸橋でつながる。その後は、小規模な埋め立てが、陸橋近くから次第に両側にひろがっていく様子がみてとれる。また、埋め立てが、それぞれの砂丘側から行われている点も見過ごす訳には行かない。そして、中央や左側の第29次調査地点において、17世紀初頭の埋め立てが、両砂丘側からではなく、すでに埋め立てられていた陸橋側から行われたことに注目し

たい。ここには、すでに砂丘を異にするという意識はなく、残された低地を一気に埋め立てて一つの町場を作ろうと言う為政者の意図が読み取れるのではないか。¹³⁾¹⁴⁾

(2) 道路遺構について

これまでの発掘調査から、中世博多の道路は、13世紀末から14世紀初めにかけて一斉に整備されたことが明らかになっている。一連の道路網の基軸になっているのは、博多の南東のはずれである今の出来町公園（戦国時代後半には、房州堀の東門）から承天寺・聖福寺の門前を通り、11世紀の埋め立てによる陸橋部を抜けて、息浜にいたる樅軸の道路である。中世の街路は、これに平行する数本の樅筋と、そのあいだを結ぶ横筋道路によって、形作られていたと思われる。そして、この街路と街区は、時期によって若干のずれを伴いながらも、ほぼその姿を変えずに、戦国時代末豊臣秀吉による博多復興（太閤町制）まで続いていた。¹³⁾¹⁴⁾

本調査地点の道路遺構は、中世街路の横筋道路に当たる。しかし、本調査では、第1面と第2面の間で道路の整地層を確認したのみで、第2面以下では検出できなかった。すなわち、15世紀以前には、道路はなかったことになるのだが、これにはふたつの解釈が可能であろう。ひとつは、16世紀になって道路がつくられたとする解釈であり、もうひとつは道路自体はそれ以前から存在し、16世紀になって本調査地点内に移動してきたとする解釈である。

後者の解釈について、まず説明する。本調査では調査区の北西辺に沿って、道路のごく一部分がかかったにすぎない。一方、これまでの調査では、中世の道路は大きくはその場所を動かないが、側溝を掘り変えたり、道路をかさ上げしたりする際に、左右にスライドするような形で、わずかながら移動することが確認されている。したがって、本来本調査区の北西辺のすぐ外に道路が通っていたとすれば、何度目かの補修の際に、本調査区内にずれ込んできたと考えることも可能である。

両者の解釈について、限られた面積の調査から判断するのは、困難である。しかし、本調査地点が、冷泉公園の一角であり、北西側が道路であることを勘案すると、今後本調査区に接して発掘調査が実施される可能性はほぼ皆無である。そこで、あえて状況証拠からの推測を試みることにする。

まず、第2面の遺構を見る(P.15, Fig.8)。調査区の南東辺に沿った145号遺構は、細い素掘りのV字溝であるが、道路遺構とは平行していない。もしも、すでに道路が存在したとすれば、その街区内部では当然その方向に規制された可能性が高いから、これは否定的な要素である。第3面では、特に区画の存在を示す遺構は見当らないが、推定された柱筋は道路遺構の方向に平行している(P.21, Fig.12)。第4面では、調査区の南東辺に沿って281号遺構（溝）が検出された。道路遺構に平行する溝で、推定された柱筋もおおむねこの方向を示している(P.23, Fig.14)。

以上、本調査地点の各面からみる限り、否定的な要素もあるものの、大方は道路の存在を肯定しているようである。ただし、これは必ずしも本調査地点の北西に接して道路が存在したこと意味しない。同じ方向性をとる道路であれば、反対の南東側にあってもかまわないわけである。しかし、前述したように、一度つくられた道路が、中世末まで続くという博多遺跡群の街路の一般的な状況を見ると、本調査地点の南東にすでに道路があったにもかかわらず、16世紀になって新たに北西側にも道路を設けるというのは、考えがたい。したがって、一応、調査地点の北西に接して道路が通っていたものと考えたい。

次に、道路が営まれた時期について推定する。上述の通り、まちがいなく、16世紀には道路は存在した。また、第4面の状況から、14世紀代には道路が存在した可能性がある。しかし、第4面は13世紀代の埋め立て上に営まれた生活面で、生活地盤としては良好なものではなかつたろう。

第40次調査では、14世紀前半に道路がつくられ、16世紀末まで継続していた。ここも、埋め立ての上に営まれており、道路面の整地土をみると、周囲の土を盛ってならしただけのようで、湿度が強く、木箸・木片などの有機質遺物が含まれていた。おそらく当時は、雨などが降れば、かなりぬかるんだ悪路に違いない。⁴⁴また、道路が通された当初の第3面では、道路の北側には顯著な造構はなく、開散とした景色であったと想像できる。道路の南側には大きな屋敷地が推定できるのであるが、その屋敷からみても裏側に当たり、あえて道路をつくる必要はないようにすら思われる。

第61次調査地点では、道路造構は検出されなかった。しかし、第40次調査検出の道路の延長方向に当たり、すぐ隣接して道路が通っていることが推測された。ここは、13世紀前後の埋め立ての上に営まれた地点である。調査・報告に当たった菅波正人は、埋め立て上に営まれた第3面から第1面の建物跡・柱筋がほぼ同一の方向をとり、第40次調査検出の道路方向と厳密には一致していないが、それを意識した町割りがなされている、と考えた。そして、「この地域は13世紀前後に埋め立てが行われて、生活面として利用されるようになるが、この地区が町の一部として本格的に機能するようになるのは、14世紀前半にこの道路がつくられてからであろう」とした。⁴⁵

これらの事例を見ると、埋め立て地の上につくられた道路に関しては、かなり計画的な要素を考えて良いようである。あるいは、埋め立て地への町屋の拡大を促進する意図があったのかも知れない。

以上、不十分ながらまとめと若干の検討を試みた。もとより、これで第87次調査の成果について語り尽くせたものではないし、何よりも報告できなかった資料が大量に残ってしまった。別考する機会を期したいと思う次第である。

註文獻

1. 池崎謙二・森本朝子「博多遺跡群出土の北宋後半期貿易陶磁」第八回日本貿易陶磁研究会集会発表資料 1987
2. 池崎謙二・森本朝子「博多出土北宋後半期の貿易陶磁」「貿易陶磁研究」8 日本貿易陶磁研究会 1988
3. 池崎謙二・森本朝子「海を越えてきた陶磁器」川添昭二編『よみがえる中世(1) 東アジアの国際都市博多』 平凡社 1988
4. 折尾学・池崎謙二・森本朝子「中世の博多一発掘調査の成果から」中山平次郎著・岡崎敬校訂『古代乃博多』 九州大学出版会 1984
5. 加藤良彦・常松幹雄「博多 79」福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集 福岡市教育委員会 1987
6. 大庭康時「博多 15」福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集 福岡市教育委員会 1990
7. 浜石哲也・菅波正人「博多 34」福岡市埋蔵文化財調査報告書第326集 福岡市教育委員会 1993
8. 菅波正人「博多 24」福岡市埋蔵文化財調査報告書第252集 福岡市教育委員会 1991
9. 佐藤一郎「博多 42」福岡市埋蔵文化財調査報告書第371集 福岡市教育委員会 1994
10. 大庭康時「博多 45」福岡市埋蔵文化財調査報告書第394集 福岡市教育委員会 1995
11. 大庭康時「都市計画道路多駄駅築港線開削埋蔵文化財調査報告書(3) 博多」福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集 福岡市教育委員会 1989
12. 大庭康時「中世都市から近世都市へ—発掘成果からみた十六・十七世紀の博多—」『福岡県地域史研究』第13号 福岡県地域史研究所 1995
13. 大庭康時「聖福寺前一丁目二番地—中世後期博多における街区の研究(1)—」「法哈噸」第2号 博多研究会 1993
14. 大庭康時「大陸に開かれた都市 博多」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む—7 東シナ海を開む中世世界』 新人物往来社 1995

博多49
博多遺跡群第87次調査の概要

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第443集

1996年（平成8年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 正光印刷
